

# 東 田 辺 遺 跡

—大阪府東住吉警察署改築工事に伴う発掘調査—

令和3年3月

大阪府教育委員会

# 東 田 辺 遺 跡

—大阪府東住吉警察署改築工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



## 序 文

本書で報告します東田辺遺跡は、大阪府東住吉警察署改築工事に先立ち平成29年度に行った試掘調査によって古墳時代以降の柱穴や古墳時代の須恵器が新たに発見されたことから、新たな埋蔵文化財包蔵地として周知した遺跡です。

東田辺遺跡が所在する大阪市東住吉区では、北部については弥生時代の集落遺跡として著名な桑津遺跡や古代の田辺廃寺など比較的多くの調査事例があり遺跡の様相が明らかにされています。一方、区の中央部については、本遺跡の他にも田辺東之町遺跡や田辺4丁目所在遺跡といった遺跡があるものの、調査事例が少なく、その内容についてはあまりわかつていません。

今回の調査は、近現代の建設工事により大部分の遺構は残されていませんでしたが、古墳時代の開発痕跡や中世の掘立柱建物・井戸・溝といった人為的な痕跡とともに江戸時代の地震痕跡を確認することができました。

これらの成果は、東田辺遺跡の土地利用の歴史を明らかにしただけではなく上町台地南東部における開発の実態解明に新たな知見を加える成果となりました。

最後になりましたが、調査の実施にあたり地元関係者ならびに大阪市教育委員会、大阪府警察本部、東住吉警察署の方々には多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたします。

令和3年3月

大阪府教育庁文化財保護課長

大野 広



## 例　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府警察本部の依頼を受けて令和元年度に実施した、大阪府東住吉警察署改築工事に伴う、大阪市東住吉区東田辺二丁目所在の東田辺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 試掘調査は、〔平成 29 年度〕文化財保護課調査事業グループ総括主査 岡田 賢、主任専門員 宮野淳一、発掘調査は、〔令和元年度〕同課調査事業グループ主査 藤田道子、技師 奈良拓弥を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、〔令和元年度〕同課調査事業グループ主査 藤田道子、同課調査管理グループ専門員 阪田育功、〔令和 2 年度〕同課調査管理グループ専門員 藤田道子を担当者として実施した。
4. 試掘調査の調査番号は 17009、発掘調査の調査番号は 19003 である。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真はイトーフォトに委託した。
6. 発掘調査にあたっては、空中写真測量を写測エンジニアリング株式会社に委託して実施した。
7. 土壌・花粉分析については、文化財調査コンサルタント株式会社に委託し、その成果を第 4 章に掲載した。
8. 本書の執筆は第 1～3 章第 1 節、第 5 章を奈良、第 3 章第 2 節を藤田が担当し、編集は奈良が行った。
9. 発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
10. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力いただいた。  
　　大阪市教育委員会、一般財団法人大阪市文化財協会、大阪府警察本部、東住吉警察署、東田辺連合町会（順不同）
11. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府警察本部が負担した。

## 凡　例

1. 本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理座標第VI系）に基づき、方位針は座標北を示す。水準値はT.P.値（東京湾平均海面）を用い、本文および挿図中ではT.P. +○mと表記する。
2. 遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。
3. 土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 /2008年度版）に拠る。
4. 遺物実測図の断面は、須恵器・陶器・磁器を黒塗り、瓦器・瓦質土器を網伏せとし、その他を白抜きとした。
5. 引用・参考文献は第4章については各節末に記載し、それ以外は巻末に一括した。

## 本文目次

序文

例言

凡例

第1章 調査にいたる経緯・経過.....	1
第1節 調査の経緯.....	1
第2節 調査の経過と方法.....	2
第2章 遺跡の位置と環境.....	6
第1節 地理的環境.....	6
第2節 歴史的環境.....	6
第3章 調査の成果.....	11
第1節 層序.....	11
第2節 検出した遺構.....	13
第3節 出土遺物.....	23
第4章 自然科学分析.....	29
第1節 土壌分析.....	29
第2節 花粉分析.....	38
第5章 総括.....	44
第1節 まとめ.....	44
第2節 耕地整理以前の土地区分.....	44
遺物観察表.....	47
報告書抄録	

## 挿図目次

図1 調査地位置図.....	1
図2 試掘調査平面・断面図.....	2
図3 調査地配置図.....	3
図4 地区割図.....	4
図5 上町台地周辺の地形分類.....	7
図6 明治時代の地形図.....	8
図7 周辺の遺跡分布図.....	9
図8 1区壁断面図.....	12
図9 2区壁断面図.....	13
図10 近代・近世遺構平面図.....	14
図11 中世・古墳時代遺構平面図.....	15
図12 振立柱建物1・012落ち込み平面・断面図.....	16
図13 002井戸・183柱穴平面・断面図.....	17
図14 046・063・073・074・082・085・086・087 平面・断面図.....	18
図15 091平面・断面図.....	19
図16 029・049・050・051・052平面・断面図.....	20
図17 036・040・067・083・102平面・断面図.....	21
図18 1区第2層・第3層・遺構出土遺物実測図.....	23
図19 1区出土鍍金貨拓影.....	24
図20 2区第2層・第3層出土遺物実測図.....	24
図21 2区第3層出土須恵器実測図(1).....	25
図22 2区第3層出土須恵器実測図(2).....	26
図23 2区遺構出土遺物・2区出土石器実測図.....	27
図24 不搅乱試料1～3の採取位置と層準.....	29
図25 東壁断面の層界に見られる凸面の連続.....	29
図26 東壁試料1下部の昼光写真と軟X線写真.....	31
図27 東壁試料1下部の軟X線写真拡大画像.....	32
図28 東壁試料1中部の昼光写真と軟X線写真.....	33
図29 東壁試料1上部の昼光写真と軟X線写真.....	34

図 30 東壁試料2の昼光写真と軟X線写真.....	35	図 33 イネ科花粉の粒径比較図.....	40
図 31 南壁試料3の昼光写真と軟X線写真.....	36	図 34 花粉ダイアグラム 東壁試料1上部.....	41
図 32 花粉分析処理フロー.....	38	図 35 耕地整理以前の土地区画.....	45

## 表目次

表1 調査地の層序.....	12	表2 花粉組成表.....	39
----------------	----	---------------	----

## 写真目次

写真1 現地公開の風景.....	5	写真3 検出した花粉化石.....	42
写真2 南壁試料3採取付近、第13層上面の変形構造..	37		

## 写真図版目次

原色図版	
図版1 1区 全景	図版11 1区 遺構 (5)
図版2 1・2区 全景	図版12 1区 出土遺物 (1)
図版3 1・2区 壁面	図版13 1区 出土遺物 (2)
図版4 1・2区 遺構 (1)	図版14 1区 出土遺物 (3)
図版5 1区 遺構 (1)	図版15 2区 出土遺物 (1)
図版6 1区 遺構 (2)	図版16 2区 出土須恵器 (1)
図版7 1・2区 遺構 (2)	図版17 2区 出土須恵器 (2)
図版8 1区 遺構 (3)	図版18 2区 出土須恵器 (3)
図版9 1・2区 遺構 (3)	図版19 2区 出土須恵器 (4)
図版10 1区 遺構 (4)	図版20 2区 出土須恵器 (5)
	図版21 2区 出土遺物 (2)

# 第1章 調査にいたる経緯・経過

## 第1節 調査の経緯

本調査は、大阪府東住吉警察署改築工事に伴うものである（図1）。

平成28年9月に大阪府警察本部施設課より大阪府教育文化財保護課に東住吉警察署の改築工事計画があり事業地の埋蔵文化財の取り扱いについて協議された。文化財保護課では、周辺の埋蔵文化財包蔵地の状況を鑑み、警察本部に対して当該事業地において埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施するよう協力を求めた。

協議の結果、平成29年6月13日に試掘調査を実施した。試掘調査は現況の建物を解体する前に実施することとなり、 $1.5 \times 1.5\text{ m}$ の調査区を1箇所設定し実施した（図2）。試掘調査では現在の地表面下より約1.0 m (T.P.+5.1 ~ 5.2 m) で、古墳時代の遺物を含む土層（3層）を確認し、また段丘構成層（8層）上面では2基のピットを検出した。さらに4層を切る3層および4~7層についても遺構の埋土である可能性が考えられる層を確認した。試掘調査の結果、古墳時代（およびその前後の時代）を中心とした遺構・遺物が周辺にまで広がる可能性が高いことが判明した。

この調査成果に基づき平成29年11月に文化財保護法第97条の発見通知が大阪府警察本部長より提出され、新たに埋蔵文化財包蔵地「東田辺遺跡」として周知した。



図1 調査位置図 国土地理院発行 2.5万分1地形図に●調査地点を追記して掲載

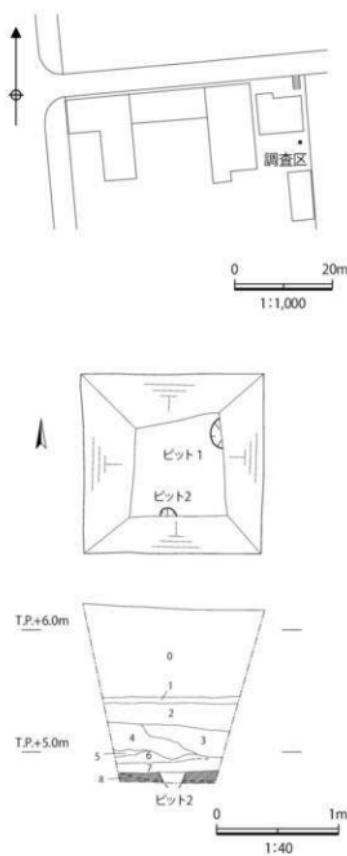


図2 試掘調査平面・断面図

この新たな埋蔵文化財包蔵地での開発事業に対する取扱いについて、警察本部と文化財保護課は協議を重ね、平成31年4月に大阪府警察本部長より文化財保護法第94条の通知がなされ、発掘調査が必要な旨を通知した。

事業には既存建物の解体作業を伴うことから、建物基礎や埋設物の解体に際して遺構・遺物の破壊がなされないよう求めるとともに文化財保護課職員の立会が必要な旨を申し添えた。解体期間中の平成31年4月4日、4月12日、4月15日、令和元年5月8日に立会を行った。

平成31年4月警察本部長より発掘調査実施の依頼を受け、令和元年8月より10月の期間、発掘調査を実施した。

発掘調査の対象範囲としたのは、新しい庁舎及び車庫棟の基礎を構築する際に鋼矢板を設置して施工されることから、鋼矢板によって仕切られる2箇所を対象とした(図3)。ただし、隣接する建物や道路などの既存構造物へ影響を及ぼさない範囲とした。

また、これらの調査に係わる遺物整理・報告書作成業務は、令和元年11月から令和3年3月まで行った。

## 第2節 調査の経過と方法

### 調査区分

鋼矢板による区画の範囲が2つに分かれるため南側を1区、北側を2区と呼称した。地区割りについては、世界測地系に則った平面直角座標系第VI系を基準とし、I～IVの大小4段階の区画を設定した(図4)。第I区画は大阪府の南西部を通る座標X=192,000m・Y=88,000mを基準に、大阪府内を縦6km、横8kmで区画する。表示は縦軸A～O、横軸0～8で表示。表示方法は縦・横の順。第II区画は、第I区画を縦1.5km、横2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定。南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北端を16とする平行式の地区名表示。第III区画は、第II区画100m単位で区画。縦15、横20。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20。表示方法は横・縦の順。第IV区画は、第III区画を10m単位で区画。縦、横10。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10。表示方法は横・縦の順。



図3 調査地配置図 大阪市の地形図に調査区を追記して掲載

遺物の取り上げについては、この地区割りを用い第IV区画ごとに行った。

#### 発掘作業

調査区は2箇所になるが、排土置場を確保するため3工区に分けて調査は実施した。令和元年8月に1区東半から調査を開始した。調査は、まず重機によって盛上、近代及び近世の耕作土を除去した。それ以下の遺物包含層をスコップや鋤籠などを使用し人力によって掘削した。掘削した土はベルトコンベヤーによって調査区外へと搬出した。遺構の検出及び掘削は主に草削り及び移植ゴテを使用した。

試掘調査の成果から古墳時代の遺物を含む土層の上面及び基盤層上面で遺構を検出する計画であったが、重機による掘削及び搅乱部分を掘削したことにより層序を確認したところ、中世の耕作によって土地が改変されており試掘調査で認められた古墳時代の地層は調査区全体のほんの一部で残存していることが判明した。そのため調査計画を変更し、遺構の検出は基盤層上面で行うこととした。

基盤層上面において遺構を検出した後、空中写真測量を行い50分の1の図面を作成した。それとは別に、土の堆積状況を示す断面図や各遺構の詳細図面をエスロンテープやメジャーを用いて作成した。その後、下層確認のため基盤層を掘削し堆積状況を確認した。重機によって搬出した土の埋戻しを行い1区東半の調査は8月末に終了した。

引き続き1区西半・2区は上記と同様の方法で調査を実施した。1区西半は9月末、2区は10月末で調査を終了した。

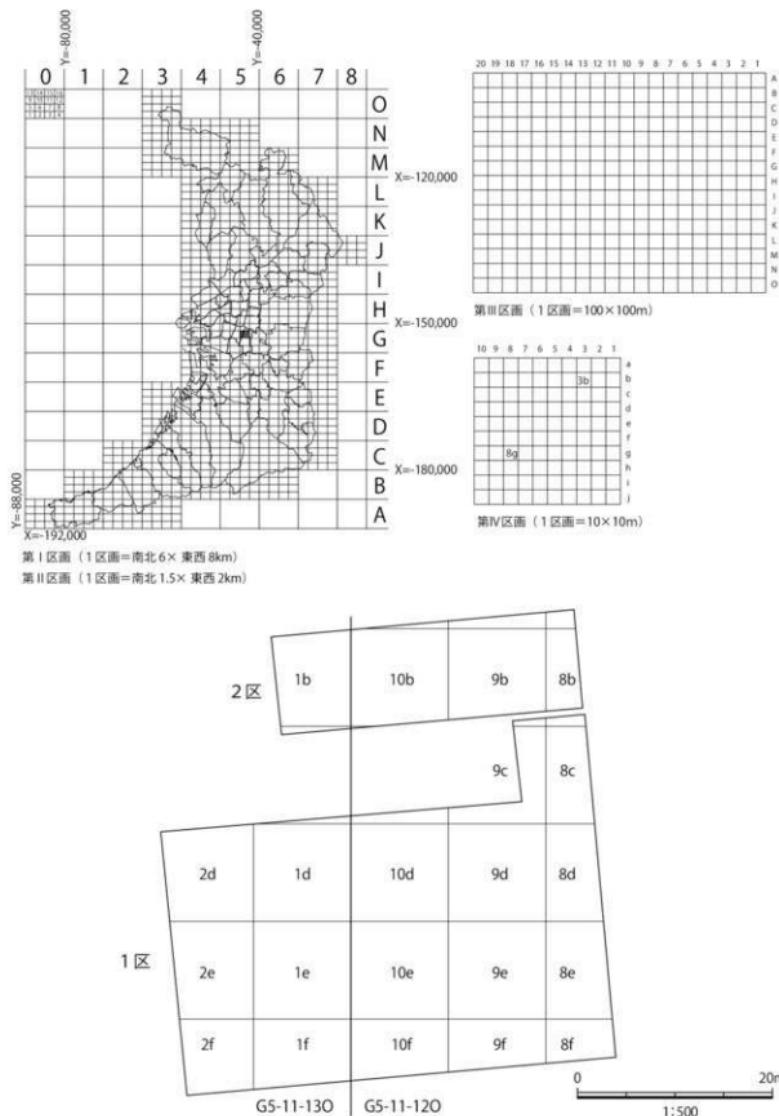


図4 地区割図

### 写真撮影

遺跡の全体を撮影するため高所作業車を利用して全景写真を撮影するとともに個別の遺構に対して半裁した後、堆積状況の観察や構造分析のための断面写真を撮影した。写真撮影はデジタルカメラ(APS-Cセンサー)を主に使用したが、重要な遺構や全景についてはデジタルカメラとともに6×7カメラで撮影を行った。

### 自然科学分析

土の堆積構造を観察していると2区において特徴的な痕跡が認められたことから軟X線撮影を行い専門家による土壤分析が必要であると判断した。試料は調査区の壁から柱状で発掘担当者が採取、梱包した後、それを委託業者に渡して土壤分析を行った。

花粉分析は、第2章第2節歴史的環境においても触れているが近世において綿作が盛んに行われていたことが文献に残されており、これを判断するため実施した。土壤分析のために採取した試料を利用して実施した。

### 現地公開

調査期間中、南に隣接する大阪市立東田辺小学校から同校小学6年生に対して発掘調査見学の依頼があった。併せて、東住吉警察署職員からも見学の依頼があったことから、令和元年10月21日に現場見学会を実施することとなった。当日は、2区の発掘調査作業を見学しそれまで出土した遺物の解説を発掘調査担当者が行った(写真1)。61名の参加があった。

調査期間中に横山洋氏(一般財団法人大阪市文化財協会)から周辺の調査成果について助言をいただいた。

### 整理等作業

報告書の作成は令和元年11月から実施した。現地で記録した図面・写真的整理を行うとともに、遺物の洗浄・復元、実測を行った。遺物の量はプラスチックコンテナ8箱分であった。

遺物実測図は、スキャナで原図を取り込みデジタルトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本を張り込み、挿図を作成した。

遺構図面のうち平面図については、空中写真測量により全体図がデジタル化されていたため、必要な箇所を拡大・加工し遺構平面図を作成した。遺構断面図及び調査区壁断面図については、遺物と同様の手順にて挿図を作成した。

現地で撮影した写真に関しては、現像・焼き付け及びデジタルプリントを行いファイルに収納した。また、報告書に掲載する遺物については、委託によって写真撮影した。

以上の作業と併行して報告文を作成し、報告書の編集作業を行った。



写真1 現地公開の風景

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

東田辺遺跡は、大阪市東住吉区東田辺二丁目に所在する。上町台地の南東部に位置しており、東には駒川と今川が北流している。

上町台地は大阪市のほぼ中央を南北に縱走する高台で、現大和川から大阪城までの南北約11km、東西は約2～3kmを測る。この台地は、北端の法円坂町一帯が最も高く、標高が23mを示し、南に行くほどに標高を下げ、住吉では10mと低くなっている。我孫子付近は上町台地の南に続く台地で、特に我孫子台地と呼ばれ、現大和川を隔てて泉北台地につながり、堺市の三国丘から泉北方面に徐々に高さを増していく。狭義の上町台地は大阪城から住吉大社までの高台を指すが、この狭義の上町台地と我孫子台地との間には、桃ヶ池・長池から住吉川の谷に続く鞍部の地形が認められる（図5）。

上町台地の地質は、中～後期更新世の頃に堆積した礫・砂及び粘土によって構成され、大阪層群の上を不整合に覆っている。狭義の上町台地は中位段丘堆積物、我孫子台地は低位段丘堆積物に区分されている。

東田辺遺跡は我孫子台地から河内低地へと標高を下げる東側緩斜面に立地し、標高5～6mを測る。現在の方形区画は、大正14年～昭和4年にかけて行われた耕地整理事業により道路が碁盤目状に配されている。また、駒川も河川改修工事により河道の屈曲を変え、土地区画と並行するように直線的な水路となった。耕地整理事業以降の開発により明治時代までの地形は大きく変化されており、現在はほぼ平坦な住宅地が広がっている（図6）。

### 第2節 歴史的環境（図7）

#### 縄文時代

縄文時代草創期の有舌尖頭器と縄文時代前期頃の石鎌が桑津遺跡で発見されており、この頃からこの地に人々が暮らし始めたと考えられる。しかし、縄文時代に人々が生活した痕跡は発見されておらず、居住の実態が捉えられるのは弥生時代に入ってからである。

#### 弥生時代

杭全遺跡では弥生時代前期前葉の大溝や土坑をはじめ、土器や石器が発見されている。中期前葉には一度廃れており、今川を隔てた対岸の桑津遺跡が盛行となる。桑津遺跡は、その存在は古くから知られており、大阪府として京都帝国大学考古学研究室の協力を得て昭和12年に発掘調査を実施している（大阪府 1942）。調査では中期の竪穴建物や溝を検出するとともに土器や石器が出土している。この調査以降これまでに中期のほぼ全期間におよぶ竪穴建物・掘立柱建物・井戸・溝が検出されており、方形周溝墓・土壙墓・土器棺墓などが見つかっている。また、集落の周囲には幅4m、深さ1.5m前後の環濠がめぐるようで、方形周溝墓などの墓域はこの環濠の外に配されていることが分かっている。後期前葉には遺構・遺物は激減しており、桑津遺跡の集落は衰退したものと考えられる。後期後半の土器棺が照ヶ丘矢田遺跡で見つかっているが、後期の様相についてははっきりしない。2019年、杭全遺跡で弥生時代終末期ごろの方形周溝墓が見つかった（一般財団法人大阪市文化財協会 2019）。

#### 古墳時代

この地域一帯には古墳が多く存在していたと推定されている。桑津墓地や山阪神社境内地は、周囲よ

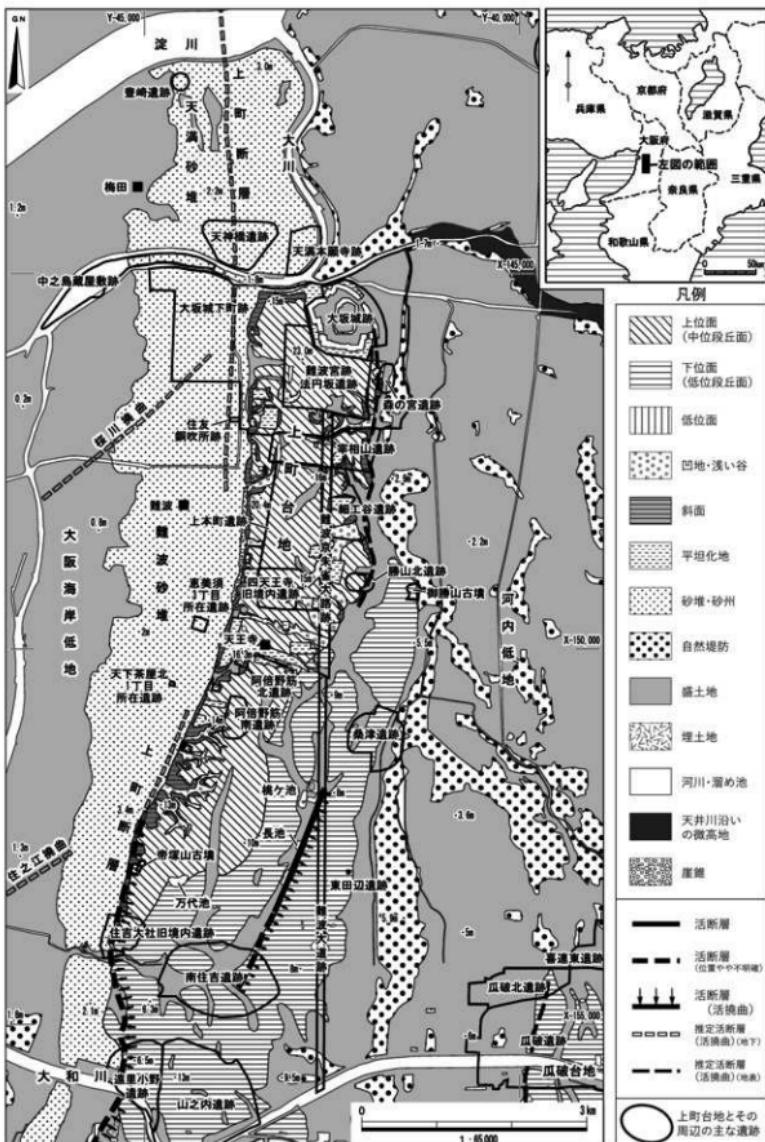


図5 上町台地周辺の地形分類 [市川ほか 2011] の色調を変更し、東田辺遺跡を追記して掲載

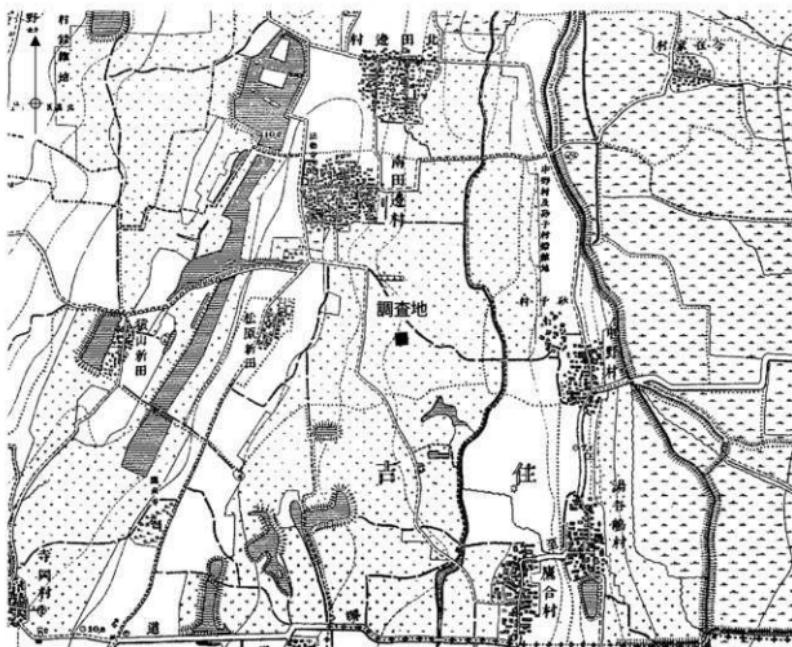


図6 明治時代の地形図 明治18年測量 仮製2万分1地形図に調査地を追記して掲載

りも高く古墳の墳丘と考えられる。また桑津村の明治時代の地籍図には「籠子塚」、「赤塚」、「大塚」といった字が記載されており「桑津の三塚」として古墳の存在が推定されている。2009年に「籠子塚」の西に隣接する美章園遺跡で発掘調査が実施され、古墳時代中期の埴輪が出土した（大阪市教育委員会ほか2010）。「籠子塚」が古墳であったことを補強する成果である。埴輪は他にも桑津遺跡、田辺東之町遺跡でも発見されており、駒川西岸一带に多くの古墳が存在していたことが考古学的にも推定できる。発掘調査によって古墳と確認された酒君塚古墳が鷹合にある。発掘調査によって現在の墳丘は江戸時代に構築されたものであることが判明したが、その下に直径35m以上、高さ2m前後の古墳の墳丘が確認された。調査では4世紀末の埴輪が出土しており前期末の古墳と考えられる。桑津から鷹合にかけて広がる4世紀から6世紀にかけて築造されたこれらの古墳群を田辺古墳群と呼ぶ。

#### 飛鳥・奈良時代

645年に孝徳天皇が難波に遷都し、上町台地の北端に造営されたのが難波長柄豊崎宮である。難波遷都にともない上町台地は大規模な開発が行われた。難波宮朱雀大路は京城と推定されている範囲を越える付近から南を難波大道路として名称を変える。大阪市内では大道路を発見していないが堺市の大和川今池遺跡では両脇に幅1～2mの溝を設けた道路が検出されている。

京城には官寺が京外には氏寺が飛鳥時代から奈良時代にかけて創建された。田辺廃寺は渡来系氏族の田辺史氏の氏寺と考えられる。これまでに複弁蓮華文軒丸瓦や均整唐草文軒平瓦など8世紀初頭から中

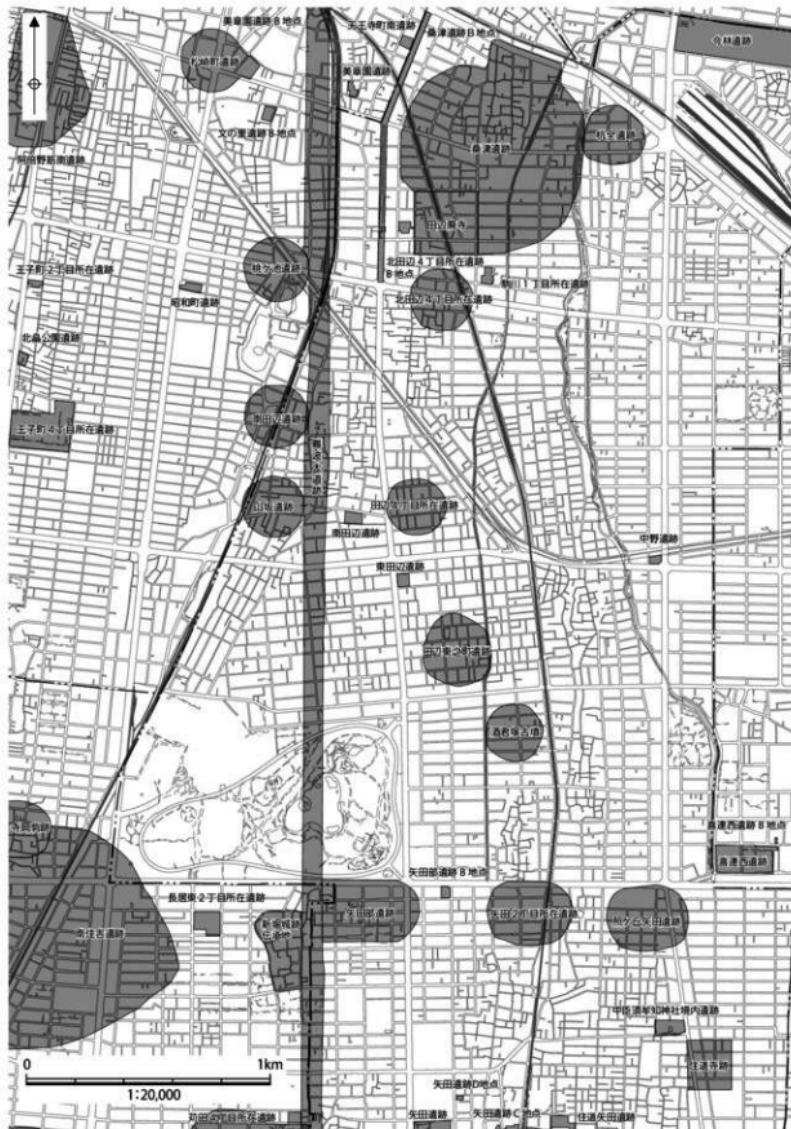


図7 周辺の遺跡分布図 大阪市の地形図に埋蔵文化財包蔵地を追記して掲載

葉の瓦が出土している。ただし、寺院に関する遺構はこれまで発見されておらず解明が待ち望まれる。隣接する桑津遺跡では7世紀前半から中頃にかけての掘立柱建物群と井戸が発見された。井戸からは呪符木簡が出土した。

田辺史氏は河内国安宿郷の田辺の地（現在の大坂府柏原市国分町）を本拠地とする百濟系の渡来氏族である。この分家が摂津国の田辺の地に移住してきたとされている。

### 平安時代

現在の東住吉区は、摂津国東生郡・百済郡・住吉郡、河内国丹治郡にまたがる地域である。和名抄に「百済郡 東部 南部 西部」とあり『摂津志』によれば、延喜式の郷名は二字とする必要があることから田の字を省いたものであり、住吉郡南田辺が百済郡南部にあたると推定している。百済郡は平安時代末期までに隣接の東生郡と住吉郡に編入されて消滅した。

山阪神社は、『摂津誌』の「田辺西神祠」に「在南田辺村 称曰山阪明神」とあり、三代実録の貞觀4(862)年11月11日条「摂津国正六位上田辺東神、田辺西神並授從五位下」と記録されている田辺西神は当社を示すものとされている。山阪神社を含めた一帯は山坂遺跡であり、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての掘立柱建物が見つかっている。

中臣須牟地神社は、延喜式摂津国条に中臣須牟地神社が記載されており当社を指すと考えられる。三代実録の貞觀元(859)年正月27日条「從五位下中臣須牟地神」と記されている。

### 鎌倉・室町時代

住道寺跡は藤原不比等が建立し、僧玄昉が開基したと伝える寺院である。源平合戦により焼失したと言われる大寺院で、これまでの発掘調査では鎌倉時代の瓦が大量に出土する溝が見つかっており、鎌倉時代ごろに寺院があったことは確実である。南西310mにある常栄寺には住道寺の塔芯礎とされる礎石が残されている。礎石の中央には円形柱座を彫り、さらにその中央に舍利孔を配しており奈良時代前期のものと推定されている。礎石には火を受けた痕跡もあり、言い伝えと一致する部分が多い。

法楽寺は、紫金山小松院と言い地元では田辺不動として親しまれている。治承2(1178)年に平重盛が創建したと伝えられ、寺記には元亀2(1571)年に織田信長により寺院は廃寺と化したが、天正13(1585)年に至って寺はひとまず復興されたと伝える。

### 江戸時代以降

江戸時代以降については、当遺跡が所在する南田辺村について記す。

元和年間より幕府の直轄領となり、代官による支配地となった。寛文3(1663)年に奥田市郎兵衛によって猿山新田が開墾され、同年に濱田五兵衛によって松原新田が開墾された。

南田辺村では、商品作物が多く生産されていたようである。特に綿作が盛んに行われており（今井美紀 1975）によって天明年間の畑作はほぼ木綿を生産していたことが明らかにされている。

『田辺町誌』には、文政の頃に松田佐二郎なるものが「田辺土佐」と称する品種を生み出し、松原新田から駒川までの一带は一面綿畑であったと記されている。また、綿木と綿木の間で「天王寺蕪青」という蕉を栽培していたようである。日清戦争後外国の綿花の輸入が激増し、次第に綿花を栽培するものが減少し、田辺町誌が刊行された大正14年には全くなくなったと記されている。

明治22年に住吉郡北田辺村、南田辺村、松原新田、猿山新田が合併して田辺村が発足した。明治29年4月住吉郡は東成郡に合併され、大正3年に田辺村は田辺町となった。大正14年に東成郡は大阪市に編入され、住吉区北田辺町、南田辺町、松原町、西田辺町となり、田辺町は廃止された。昭和18年に旧町域が東住吉区と阿倍野区の各一部となる。昭和26年に町名が追加され調査地は田辺東之町二丁目となり、昭和55年の住居表示実施に伴い田辺東之町二丁目は東田辺二丁目となった。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 層序

調査地は、近現代の建物建設に伴い盛土が施されており、地表面はT.P.+5.8m前後でほぼ平坦面を形成している。かつての東住吉警察署では深さ2mを越える基礎が敷設されており、多くの部分で耕地整理以前の地層は残されていなかった。

今回の調査では部分的な深掘りトレンチを含め現地表下からT.P.+3.6mまでの堆積層を観察した（図8・9）。この結果に基づき層序の表1を作成した。なお、1区及び2区の断面図において層名表記の統一は行わず、表1において対応する層を明記する。また、下記にあるa層・b層は作土層及び母材を示しているのではなく、調査時において中世層を第3層として調査しており、調査時の遺物ラベルと対応関係を保つためa・bは枝番として使用している。

第0層：耕地整理以降から東住吉署が解体されるまでの近現代の盛土である。層厚は50～60cmである。

第1層：黄灰色～褐灰色シルト質砂～砂質シルトで層厚は20cmである。肥前磁器などが出土しており19世紀前半から耕地整理までの間に形成された耕作土である。

第2層：灰白色粘質シルトで層厚は20～40cmである。肥前磁器・陶器などが出土し、17世紀～19世紀前半までの耕作土と考えられる。

第3a層：褐灰色粘質シルトで層厚は10～20cmである。瓦器や瓦質土器が出土する。

第3b層：灰黄褐色粘質シルトで層厚は5～10cmである。西側で部分的に観察できた。

第3c層：黒褐色粘質シルトで層厚は2～10cmである。

第3d層：褐灰色粘質シルトで層厚は2～8cmである。東側で部分的に観察できた。

第4層：黒褐色粘質シルト。遺構の埋土にのみ認められる層である。遺構内からは古墳時代中期の須恵器が出土している。

第5層：低位段丘構成層である。中世及び近世の耕作に伴う掘削により上部はかなり削平されている。第5a層及び第5b層はシルトが卓越する。第5b層の下部にはわずかに細礫が堆積する。第5c層では樹根跡などの生物擾乱が多く見られる。第5d層はラミナが認められる。後期旧石器時代に比定でき、遺物の有無を調べたが遺物は出土しなかった。

今回の調査では第5層の上面で遺構を検出した。このため同一面において古墳時代から近世までの遺構を検出している。

表1 調査地の層序

層序	岩相	色	層厚(cm)	特徴	時代	1区	2区
第0層	近現代盛土		50~60		近現代	盛土	盛土
第1層	黄灰色シルト質砂 褐灰色粘質シルト	2.5Y5/1 7.5Y8/1	20		近世末~近代	1	1
第2層	灰白色粘質シルト	10YR7/1	20~40		近世	5	3
第3a層	褐灰色粘質シルト	10YR5/1 10YR4/3	10~20	冲積崩		8	5
第3b層	灰黃褐色粘質シルト	10YR4/2	5~10		中世	9	7
第3c層	黒褐色粘質シルト	10YR3/1	2~10			10	8
第3d層	褐灰色粘質シルト	10YR6/1	2~8			11	9
第4層	黒褐色粘質シルト	10YR3/1	-		古墳時代か	遺構埋土	
第5a層	灰黃褐色粘質シルト	10YR6/2 10YR5/6	10~15			13	13
第5b層	黒褐色粘質シルト	10YR5/6	40~50	低位段丘構成層	後削旧石器時代	14	
第5c層	灰白色シルト質砂	10YR8/2	20~40			15	
第5d層	灰白色小礫	10YR8/1	50以上			16	

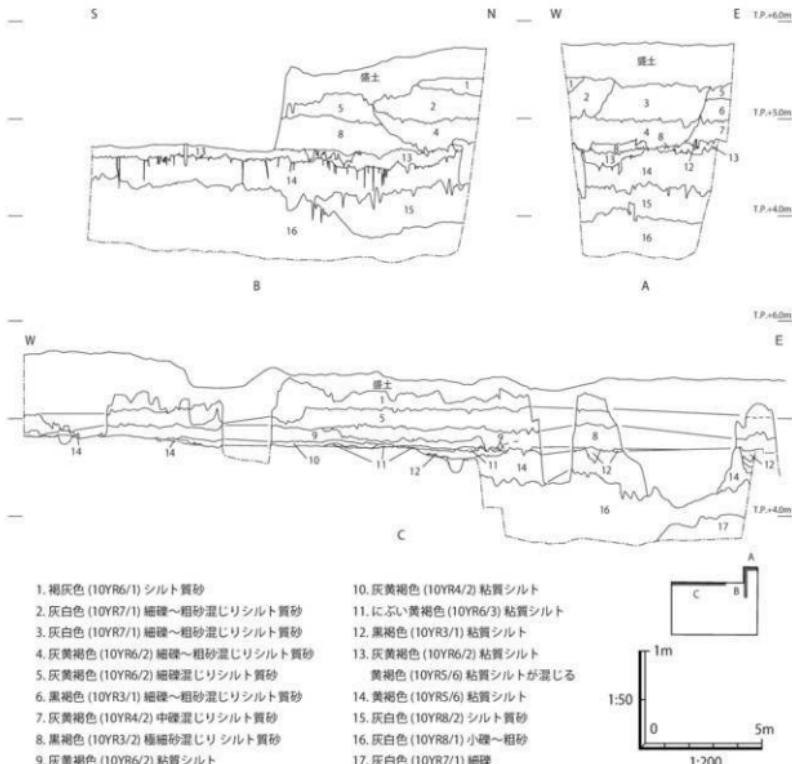


図8 1区壁断面図

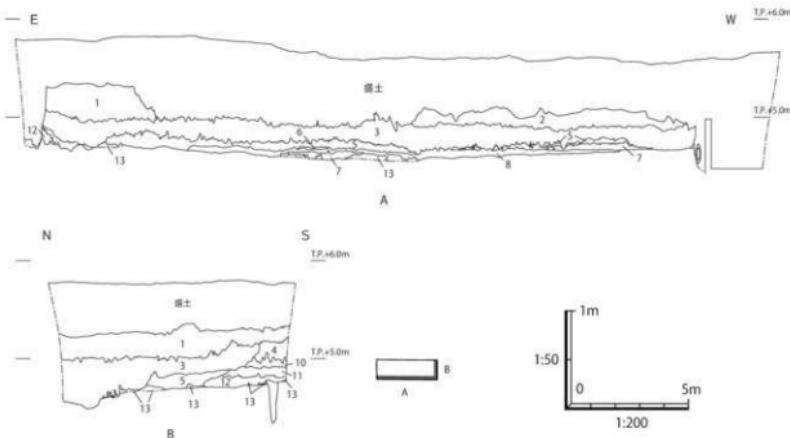
## 第2節 検出した遺構

上述のとおり1区は近現代の建設工事による掘削が基盤層にまで達しており、耕地整理以前の土層は大半が残存していなかった。また、試掘調査で検出した古墳時代と考えていた層が一部にしか残存しないことが判明したことから基盤層上面を面として調査を行った。そのため近代から古墳時代までの遺構を同一面で検出しており、以下では出土遺物や遺構埋土の検討結果から導き出された時代に順じて遺構の詳細について述べる。

### 近代（図10）

#### 土坑群

1区の南側において平面形が方形を呈する土坑群を検出した。埋土には第2層、第3層及び第5b層が偽礫状に堆積しており、堆積状況も一定方向から埋め戻された様相であった。1区南壁において第0層の直下から切り込まれていることを確認しており耕地整理以前の近代の遺構である。近隣に所在する桑津遺跡や長居東2丁目所在遺跡の調査成果において方形区画の連続する土坑群が検出されており、その成果から土取り坑であることが明らかにされている。近隣の例では基盤層の上部に堆積するシルトを探掘しているが本遺跡では基盤層である第5c層や第5d層の砂や礫を探掘している。土坑群については一部のみの掘削にとどめた。



- 1. 底黄褐色～青灰色 (10YR4/2 ~ 5BG5/1) 細礫～極粗砂混じり粘質シルト
- 2. 黄灰色 (2.5YS/1) 中礫～細礫混じりシルト質砂
- 3. 底黄褐色 (10YR6/2) 粗砂混じり粘質シルト
- 4. 黑褐色 (10YR3/1) 極粗砂混じり粘質シルト
- 5. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粗砂混じり粘質シルト
- 6. 底黄褐色 (10YR4/2) 極粗砂混じり粘質シルト
- 7. 黒褐色 (10YR3/1) 粗砂混じり粘質シルト
- 8. 褐灰色 (10YR6/1) 粘質シルト 岩混じる
- 9. 暗褐色 (10YR3/3) 極粗砂混じり粘質シルト
- 10. にぶい黄褐色 (10YR5/1) 粘質シルト
- 11. 黑褐色 (10YR3/1) 相砂混じり粘質シルト 岩混じる
- 12. 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質シルト

図9 2区壁断面図

## 近世

## 001 落ち込み・116 畦畔

001 落ち込みは1区の北東端で検出した遺構である。東側には畦畔が構築されており土地区画を示す落ち込みと考えられる。2区の南東端では続く畦畔として116 畦畔を検出している。001の埋土からは図化していないが19世紀代の磁器が出土しており、畦畔も近世に属する。ただ、畦畔を構成する盛土の下部は中世の耕作土である第3層と対応しており中世にまで遡る可能性がある。

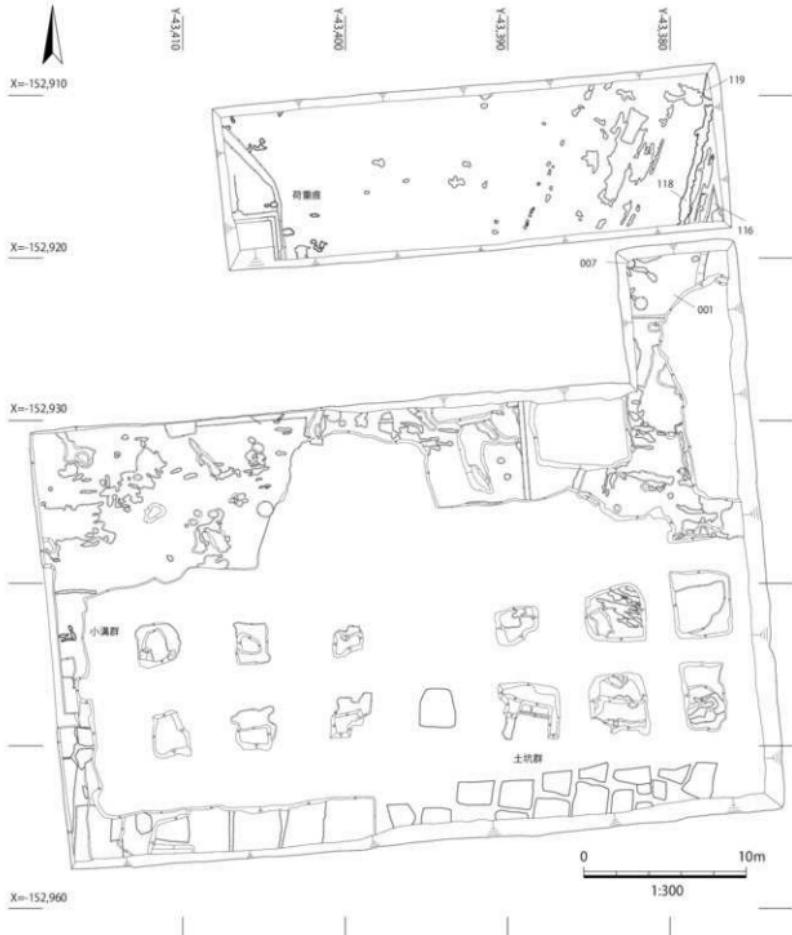


図10 近代・近世遺構平面図

試掘調査ではこの116鞋畔部分を調査しており、出土した須恵器は鞋畔の盛土内に含まれていたものである。2区東半の第3層や基盤層上面において多くの須恵器が出土しており、須恵器を包含した堆積層を盛土として造成した二次的な堆積の遺物である。本来は古墳時代から中世までに堆積した層があったが中世の開発により失われたことを示している。

## 007 土坑

直徑0.54m、深さ0.35mを測る土坑である。001 落ち込みを掘削後に検出した。埋土には第2層、

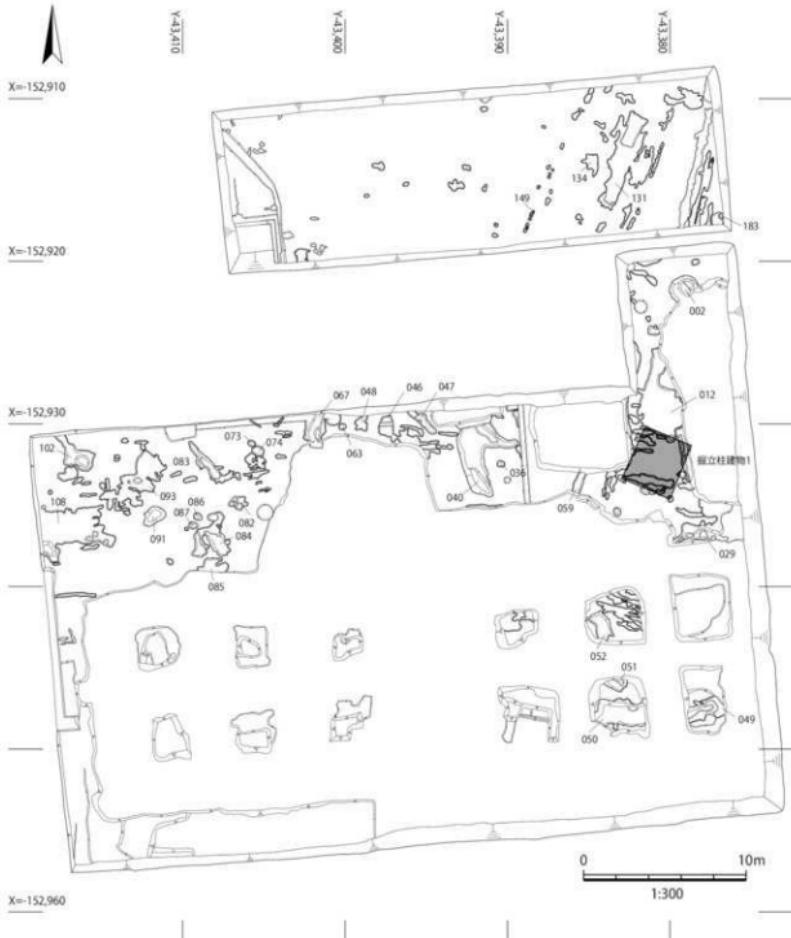


図11 中世・古墳時代遺構平面図

第3a層、第5b層がそれぞれ5cm大で偽礫として堆積していた。古墳時代の須恵器が出土したが、埋土の構成から近世に属する。

#### 118溝・119土坑

118溝は2区の東で検出した長さ7.5mを測る溝である。N-13°-Eの軸を持ち116畦畔と並行する。119土坑は調査区の東端に位置し全形を知ることはできないが深さは0.2mを測る。基盤層上面を遺構面として調査したため深い部分のみを捉えており本来は118溝と一連のものと考えられる。機能は排水用の溝と水を貯める土坑であろう。埋土からは古墳時代の須恵器破片が出土したが、埋土が第2層であることから近世に属する。

#### 小溝群

1区の西側において東西に平行する軸を持ち第2層を埋土に持つ小溝を検出した。耕作に伴う鋤溝である。

#### 荷重痕

2区の西側において荷重痕を検出した。当初は鋤や鍬による掘削痕跡と考えていたため遺構として捉えたが検討した結果すべて地震痕跡であった。いずれの荷重痕も基盤層と第3c層が地震の振動によりマーブル状に混じった状態となっている。地震痕跡の詳細については第4章第1節を参照。

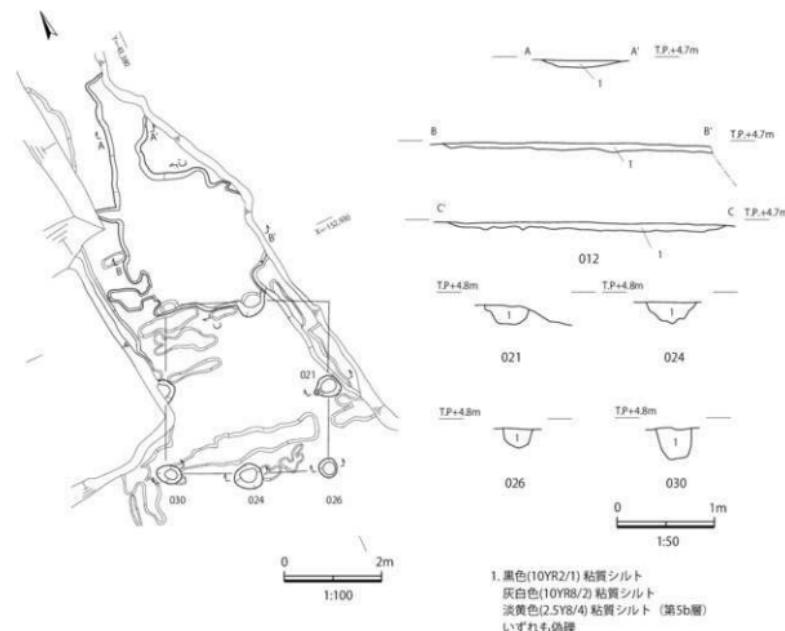


図12 据立柱建物1・012 落込み平面・断面図

## 中世（図11）

## 掘立柱建物1（図12）

021・024・026・030柱穴で構成される掘立柱建物である。北西側は搅乱によって全形を知ることはできない。検出当初は掘立柱建物との認識はなかった。012落ち込みを掘削後、周囲よりも深く掘削できる部分があった。この時においても柱穴との認識はなかったが、平面図を整理しているときに桁行及び梁行ともに2間に復元できる掘立柱建物となることに気が付いた。012落ち込みとして掘削したため、柱穴の一部に遺構番号を付していない。N-23°-Eの軸を持つ。柱間の寸法は柱痕が認められなかったため明確にはできないが、柱穴の中心間の距離においては、1.7～1.65mを測る。024・026柱穴から土師器片が少量出土しているが図示し得ず、時期を特定できる遺物はない。いずれの柱穴も黒色粘質シルト、灰白色粘質シルト及び淡黄色粘質シルトの偽礫で構成される。後述する012落ち込みと同じ埋土を構成しており012落ち込みからは中世の遺物が出土した。柱穴から出土した遺物では時期は特定できないが012落ち込みとの関係から中世に属すると判断する。

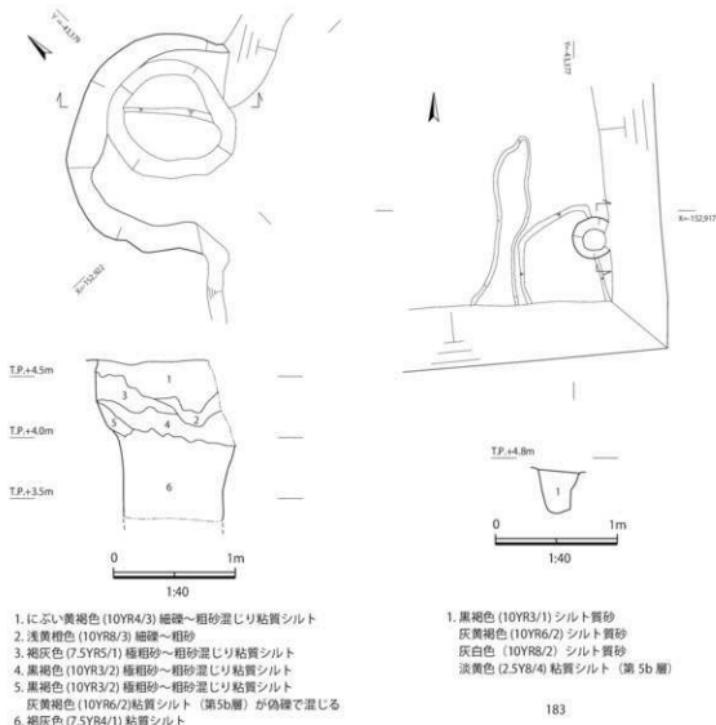


図13 002 井戸・183 柱穴平面・断面図

## 012 落ち込み

1区の北東部分にあり、L字型の平面形を呈する。掘立柱建物の柱穴と同じ埋土で構成されており、掘立柱建物に伴う排水溝と考えられる。小破片ではあるが瓦器が出土しており、中世の所産と考えられる。

## 002 井戸（図13）

1区の北東部分で検出した。平面形は円形を呈し、二段掘りとなった断面形では上部では径 1.8 m、下部では径 0.8 m を測る。井戸枠は検出されなかった。埋土の堆積状況から廃棄されたのち、周囲からの水の流入により徐々に埋まっていたが最終的には人の手によって埋められている。埋土の第6層から瓦質土器が出土しており 14世紀代に井戸としての機能は失われたと考える。また、後世の地震による変形を受けており、上部は特に圧縮による変形が認められた。変形時期については不明である。

## 183 柱穴（図13）

2区の南東角に位置し、試掘調査の際に確認していた遺構である。直径 0.36 m、深さ 0.4 m を測る。

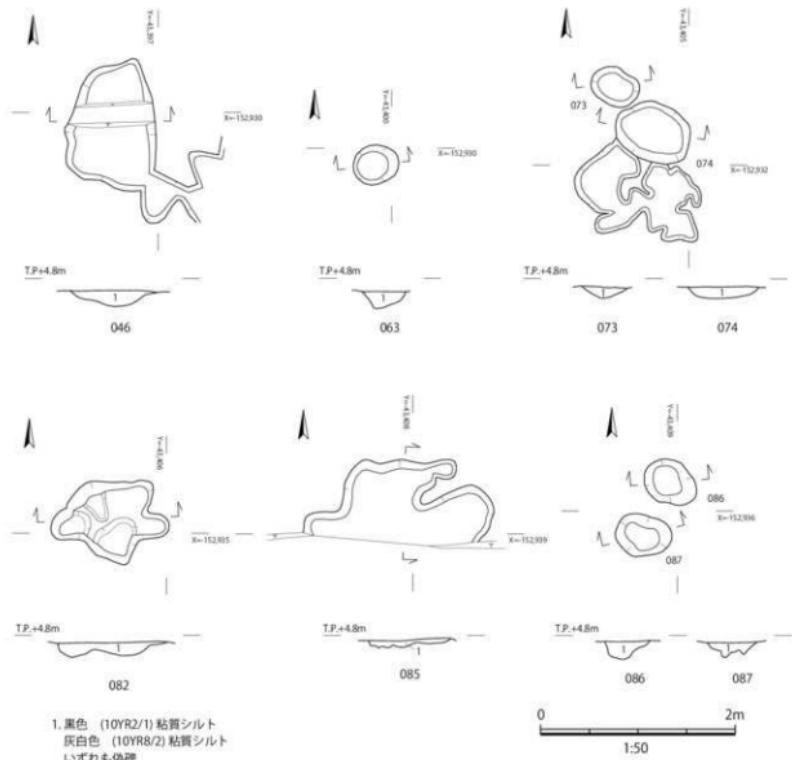


図 14 046・063・073・074・082・085・086・087 平面・断面図

埋土は掘立柱建物1の柱穴の埋土とその他にシルト質砂によって構成されている。いずれも1cm大の偽礫である。土師器の破片が1点出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。柱穴と同じ埋土が含まれていることから中世に属すると判断する。

#### 046 土坑(図14)

長さ1.3m、幅0.9m、深さ0.16mを測る土坑である。南側は鉢溝と一体となっており切り合は認められなかった。埋土は上述の遺構と同じ基盤層と中世層が偽礫で混ざっている。古墳時代の須恵器が出土したが、埋土から中世に属すると判断する。

#### 063 土坑

径0.5m、深さ0.2mの土坑である。埋土は基盤層と中世層が偽礫で混じる。柱穴となる可能性があるが、対となる柱穴がないことから土坑としておく。古墳時代の須恵器が出土したが、埋土から中世に属すると判断する。

#### 073・074 土坑

073は、径0.5m、深さ0.12m。074は、径0.7m、深さ0.13mの土坑である。埋土はいずれも基盤層と中世層が偽礫で混じる。埋土からは土師器の破片が出土したが細片のため時期は不明である。埋土から中世に属すると判断する。

#### 082 土坑

長さ1.2m、幅0.8mを測る土坑である。平面形態は不定形である。耕作に伴う痕跡と考えられる。埋土は基盤層と中世層が偽礫で混ざっており、中世に属すると考えられる。

#### 085 土坑

長さ1.9mを測るが南は攪乱によって全形を知ることができない。深さは0.15mで、埋土は基盤層と中世層が偽礫で混ざっており、中世に属すると考えられる。

#### 086・087 土坑

いずれも径0.5m、深さ0.18mを測る。埋土は基盤層と中世層が偽礫で混ざっており、中世に属すると考えられる。いずれの土坑からも古墳時代の須恵器が出土した。

#### 091 土坑(図15)

長さ1.5m、幅0.9m、深さ0.25mを測る。古墳時代の須恵器が出土した。遺構の中から古墳時代の須恵器が出土し古墳時代の遺構とも考えたが、埋土は基盤層と中世層が偽礫で混ざっており、中世に属すると考えられる。

#### 131溝

2区東側で検出した。N-23°-Eの軸を持つ。長さは約6m、幅は1.2~1.6mを測る。周囲にも鉢溝や鉢や鍬による掘削痕跡が列状にあり、131溝と同一の軸を持つことからこれら一帯にあるものは耕作に伴う痕跡と考えられる。上述した116畦畔とは軸を異にしており時期差があるものと考えられる。埋土は基盤層と中世層が偽礫で混ざっている。古墳時代の須恵器が出土しているが、瓦器と考えられる破片が1点出土している。小片のため詳細な時期は不明である。

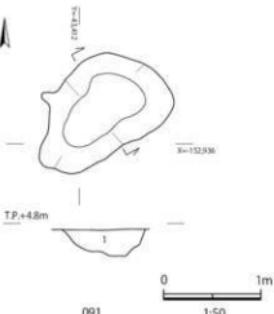


図15 091 平面・断面図

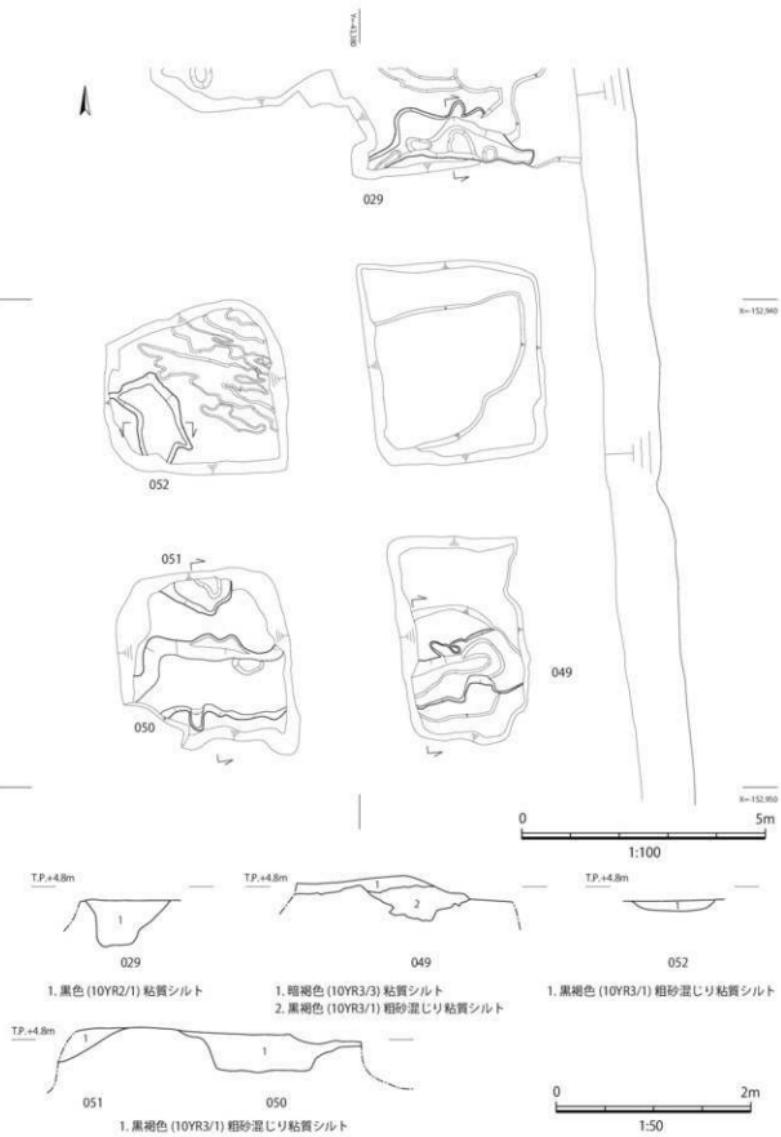


図 16 029・049・050・051・052 平面・断面図

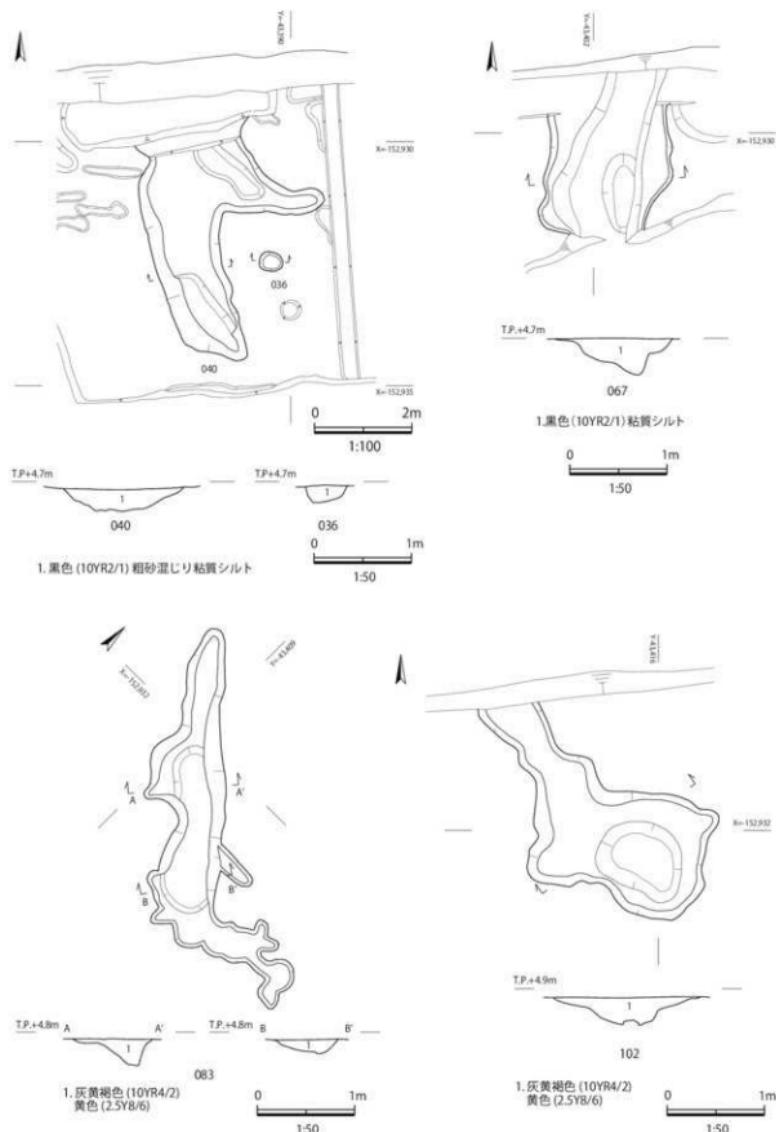


図17 036・040・067・083・102 平面・断面図

#### 古墳時代

##### 029・049・050・051・052 溝（図 16）

1 区の南東で検出した溝である。搅乱によって全形は確認できない。当初は方形周溝墓や小型低方墳といった遺構を想定したが、以下の理由から墓に伴う溝ではないと判断した。029・049・050・051・052 はいずれも同様の特徴を有した遺構であることからここで一括して記す。

いずれの埋土も黒色粘質シルトであり、土壤構造はほぼ水平に堆積しており均質である。底の形状が凸凹しており掘削痕跡以外に樹の根と考えられる痕跡が見られた。墓の周溝であるならば、溝底の形状は凸凹せず台形を呈する例が多い。また、周溝からは一定量の遺物が出土し完形品に近いものの出土が多い。しかし、遺物の出土は 050 溝から須恵器がわずかに出土したのみである。

掘削の痕跡及び樹の根の痕跡を考え合わせるならば、これらの遺構は樹木の根を掘り返した際の伐根痕跡が溝状になっているのではないかと推測される。

遺構内に堆積する土層は壁面と対応する土層がないことから中世以前の遺構と考えられ、050 から出土した須恵器からこれらの遺構は古墳時代中期後半と推測できる。（辻本裕也 2014）によって古墳時代後期ごろに上町台地の植生が変化したことが植物化石分析及び古地理情報の検討から指摘されている。5 世紀後半において草地の領域が拡大し、林分域が減少する植生の変化は人為的植生搅乱が発生したと指摘しており、今回検出した遺構が上町台地における人による開発行為の具体的痕跡事例として考えられるのではなかろうか。

##### 040・067・083・084・102 溝（図 17）

伐採痕跡又は樹の根跡と考えられる遺構は 1 区西側でも検出した。特徴は平面形態が不定形で底の形状が凸凹となる。埋土は黒色粘質シルトで均質的な堆積が確認できる。いずれの遺構も樹の根又は伐根による溝状遺構と考えられる。067・083 からは古墳時代の須恵器が出土している。

## 第3節 出土遺物

## 1区第2層（図18）

1は土師器ミニチュアの椀、高台径は2.6cmを測る。注ぎ口がつけられている。玩具の一種か。2は土師器焰焰、残存高5.3cmを測る。3は陶器すり鉢の口縁部、口径（復原）30.0cmを測る。内面におろし目がわずかに残る。4は白磁椀底部、カンナ削りにより形成された高台は、径（復原）6.4cmを測る。5は東播系須恵器すり鉢の口縁部、小片のため口径は復原できなかった。6は須恵器高杯脚部、底径（復原）8.3cmを測る。脚部は底部直上で下方に大きく屈曲し外側に面を成し、また端面上部に断面三角形の稜をめぐらしている。脚部外面はカギ目調整がほどこされており、台形透かし穴が一部残存している。7は須恵器高杯脚部、底径（復原）9.8cmを測る。円錐状に広がる脚部を持ち、脚端部は面をもつ。円形の透かし穴が一部残存している。

## 1区第3層（図18）

8は白磁椀口縁部、口径（復原）16.0cmを測る。口縁端部は外方にやや膨らむ面をもつ。9は瓦器椀の底部、貼り付け高台は、径（復原）4.4cmを測る。10は瓦器皿、口径（復原）8.0cmを測る。口縁部周辺はヨコナデ、外面底部は指オサエが残る。11は土師器皿、口径（復原）8.0cmを測る。12は須恵器有蓋高杯の蓋、つまみ部径3.6cmを測る。13～15は須恵器高杯脚部である。13は底径（復原）7.0cm、脚部は底部直上で下方に大きく屈曲し、面を成す。径（復原）0.7cmの円形の透かし穴が残る。14は底径（復原）8.0cmを測る。脚端部は外面に膨らむ面を持ち、また端面上部に断面三角形の稜をめぐらしている。方形の透かし穴が一部残存している。15は底径（復原）9.0cm、脚端部は外面に膨らむ面をもつ。方形の透かし穴が一部残存している。16は須恵器壺の底部、底径（復原）10.0cmを

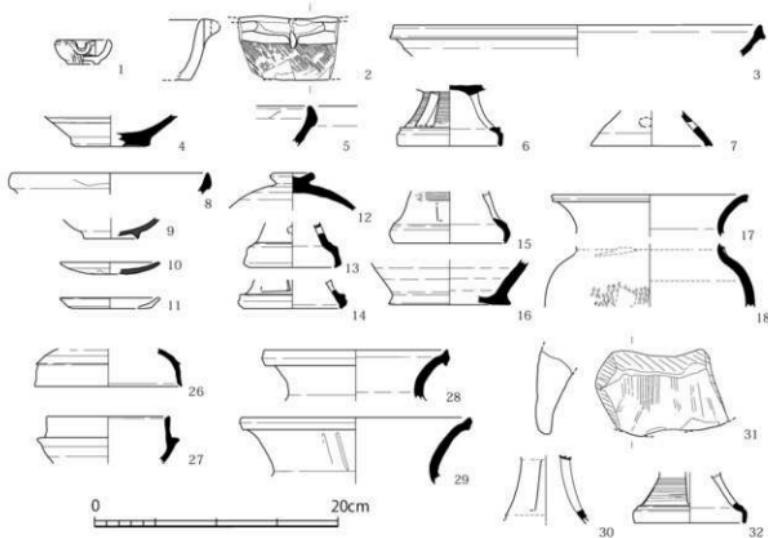


図18 1区第2層・第3層・遺構出土遺物実測図

測る。底部は平底で体部との境は断面三角形状に外方に突出している。底部外面にはヘラ状工具痕が残る。17・18は陶質土器壺の口縁部と体部（頸部から上半部）で、体部片は遺構108から出土している。両者の接点はないが、同一個体と思われ、他にも固化できなかった体部片（19～25）は、図版13に掲載紹介している。口径（復原）16.0cmを測り、体部外面は平行タタキ目が残り、内面はナデ調整で仕上げられている。5世紀中頃以降の遺物と考えられ、今回の調査で唯一出土した韓式系土器になる。

## 遺構出土（図18）

26・27は遺構47から出土した須恵器である。26は杯蓋、天井部の中心は欠損している。口径（復原）12.0cm、天井部と口縁部の境には断面三角形の稜があり、口縁端部は内傾斜面をもつ。27は杯身、口径（復原）10.0cm、受部径（復原）11.7cm、受部は横方向に伸び、口縁端部は内傾斜面をもつ。2点の須恵器はI型式5段階に相当する。

28は遺構48から出土した須恵器、甕の口頸部である。口径（復原）15.0cmを測り、内湾しつつ上方に伸びる端部は上下に肥厚し、やや外方に膨らむ面をもつ。

29～31は遺構93から出土した須恵器・土師器である。29は須恵器甕の口頸部である。口径（復原）18.7cmを測り、口縁部は内湾しつつ上方に伸びる端部は面をなす。30は須恵器高杯脚部、基部径（復原）4.0cmを測る。脚端部は欠損しているが、方形の透かし穴が一部残存している。31は土師器移動式カマドのひさし部分、最大長10.9cm、最大幅7.1cmを測る。32は近代の土坑から出土した須恵器高杯の脚部である。底径（復原）9.0cmを測る。脚部は底部直上で下方に大きく屈曲し外側に面を成す。脚部外面はカキ目調整がほどこされており、方形の透かし穴が一部残存している。

## 1区撲乱（図19）

33は皇朝十二銭「和同開珎」の拓影である。1区南東部の撲乱内から出土した。1区南半部は旧庁舎の基礎、明治以降の土坑の埋戻し土などの撲乱土が混入しており、その中からの出土品であるため、あくまで参考資料として紹介しておく。

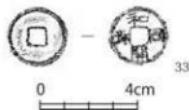


図19 1区出土銭貨拓影

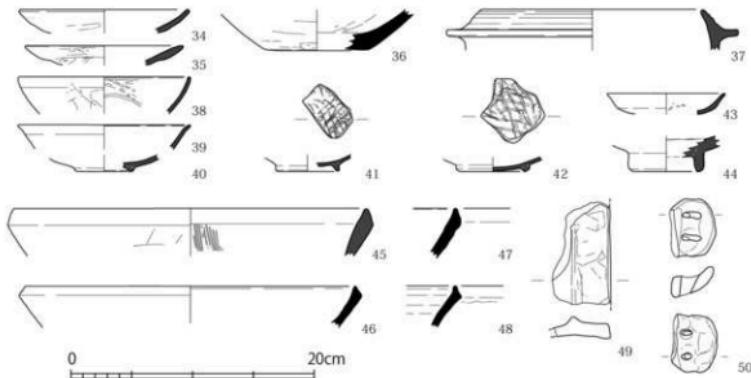


図20 2区第2層・第3層出土遺物実測図

## 2区第2層(図20)

34は瓦器皿である。残存部分がわずかで器高が低いため皿としたが、口径(復原)14.0cmのやや大振りな皿になる。35は土師器皿、口径(復原)13.0cmを測る。36は須恵器すり鉢の底部、平底で底径(復原)8.5cmを測る。37は瓦質土器の羽釜口縁部、口径(復原)18.2cmを測り、鍔より下は

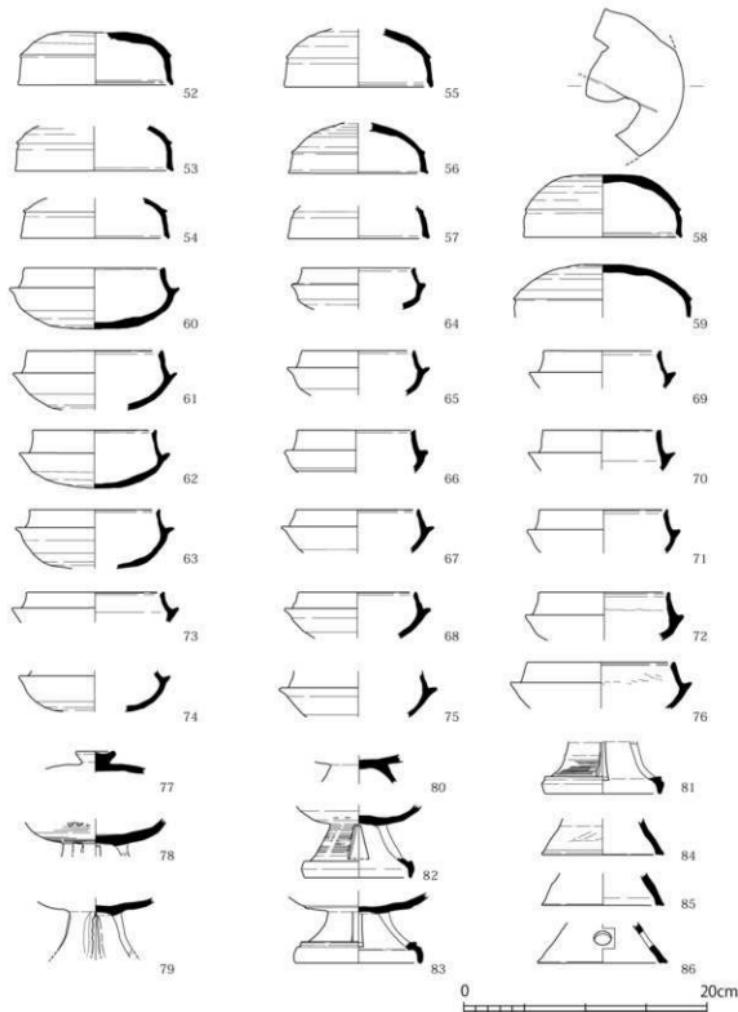


図21 2区第3層出土須恵器実測図(1)

欠損している。15世紀代か。

#### 2区第3層（図20）

38～42は瓦器椀、38・39は口縁部のみ残存、共に口径（復原）14.0cmを測る。40～42は高台部分のみ残存、41・42は断面台形のやや高さのある高台が張り付けられ、内面見込み部分に斜格子状の暗文が残る。高台径は40が4.2cm、41は5.2cm、42が6.0cmを測る。12世紀代か。43は瓦器の小皿で口径（復原）9.6cm、残存高1.7cmを測る。44は青磁の高台部分、断面長方形の高い高台をもち、口径（復原）6.2cmを測る。45～48はすり鉢の口縁部、いずれも口縁端部外側に面をもつ。45は瓦質土器のすり鉢の口縁部、口径（復原）29.0cm、内面に一部おろし目が残る。46～48は須恵器すり鉢の口縁部、46は口径（復原）27.0cmを測る。瓦質土器のすり鉢は15世紀代、須恵器のすり鉢は12世紀から13世紀代か。49は土師質土器移動式カマドの焚口部分の小片、最大長8.5cm、最大幅4.8cmを測る。50は土師質土器鍋か鉢の把手、形状は舌状で最大長4.9cm、最大幅3.8cmを測る。上下に貫通する孔が二か所穿たれている。51は緑釉陶器杯である。内外面ともに緑釉が施されている。

#### 2区第3層出土須恵器（図21・22）

図化した須恵器の詳細を説明する。

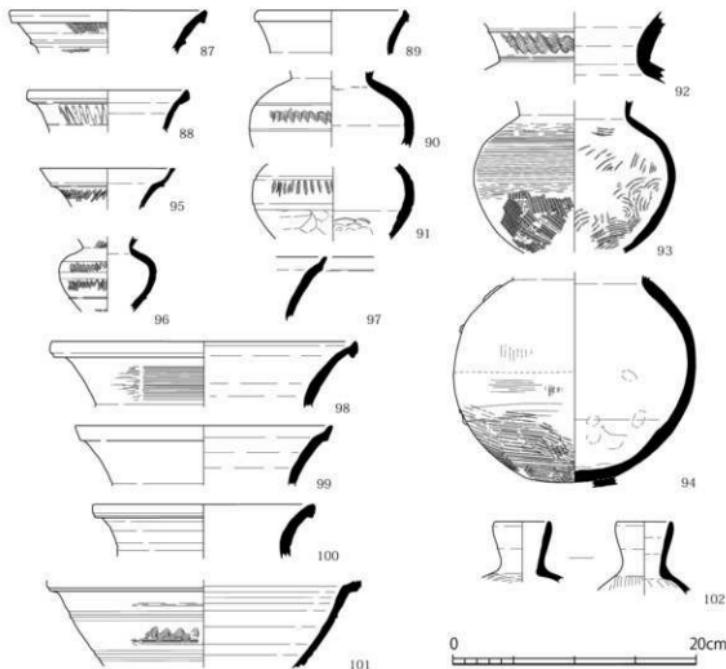


図22 2区第3層出土須恵器実測図（2）

52～59は須恵器杯蓋、8点を図化掲載した。図化した全ての個体は天井部と口縁部の境に断面三角形の稜を、また口縁端部は内傾する面をもつ。52・53の天井部高は口縁部高に対して低く、52の天井部の形状は平らである。52の口径（復原）は12.5cm、器高（残存高）は4.4cm、53の口径（復原）は12.9cm、器高（残存高）は3.7cmを測る。55・56・58は天井部高が口縁部高に対して高く、形も丸みを帯びている。58は外面天井部にヘラ記号がある。55の口径（復原）は12.0cm、器高（残存高）は4.8cm、56の口径（復原）は11.3cm、器高（残存高）は4.2cm、58の口径（復原）は12.8cm、器高は図化したものの中でも最も高く5.2cmを測る。59は口縁端部は欠損、体部最大径は稜径と等しく14.6cmを測り、図化したなかで最も大きい。天井部のヘラ削りは天井部全体の4/5まで施されており、色調は灰白色で焼成がやや甘い。60～76は須恵器杯身、15点を図化掲載した。図化した個体は全て口縁端部に内傾する端面もしくは沈線をもつ。60はほぼ水平に外方に伸びる受部、内湾しつつ上方にのびる立ち上がりをもち、端部は内傾沈線をもつ。口径（復原）は11.4cm、器高は5.0cm、受部径13.9cmを測る。61は上外方に伸びる受部、内傾しつつ上方に伸びる立ち上がりをもち、端部は内傾沈線をもつ。口径（復原）は11.4cm、器高は4.9cm、受部径13.4cmを測る。62・63も61とほぼ同様の形状だが、口径が一回り小さく、62は口径（復原）10.0cm、器高は4.8cm、受部径12.4cm、63は口径（復原）10.6cm、器高は（残存高）4.8cm、受部径13.0cmを測る。64～72も口径（復原）が10cm前後の一群で、ほとんど個体差がないが、64・66は受部立ち上がり高が低く、短く上方に伸びる形状をもつ。73・76は口径11cm以上を測るが、ともに大きく底部が欠損している。77～86は須恵器高杯、10点を図化掲載した。77是有蓋高杯の蓋、つまみ部分を中心に残存している。つまみ部の直径は3.3cmである。78～80の3点は杯部と脚部の取り付け部である基部付近が残存している。77と78は、脚部の長方形透かし穴の一部が残っており、欠損しているが脚端部は81～83と同様の形態をもつものと思われる。79は透かし穴の周囲に面取りが施されている。基部に透かし穴が認められない80は84～86と同様の形態をもつものであろう。81～83は脚端部が外面に膨らむ面を持ち、また81と83は端面直上に断面三角形の稜線をめぐらしている。また81・82は脚部外面にカキ目調整が認められる。脚部底径は復原径で81は10.0cm、82は8.8cm、83は10.3cmである。84～86は脚部が円錐状に広がり、脚端部は面をもつ一群で、86は円形の透かし穴をもつ。3点とも残存率がわずかではあるが、底径（復原）は84・85が10.0cm、86は10.6cmとなる。87～89は小型壺か甕の口縁部、87は口径（復原）16.0cm、口縁部は上外方に伸び端部は面をもつ。頸部は断面三角形の稜で区画されており、それぞれに波状文が施されている。88は口径（復原）13.0cm、口縁部は内湾し

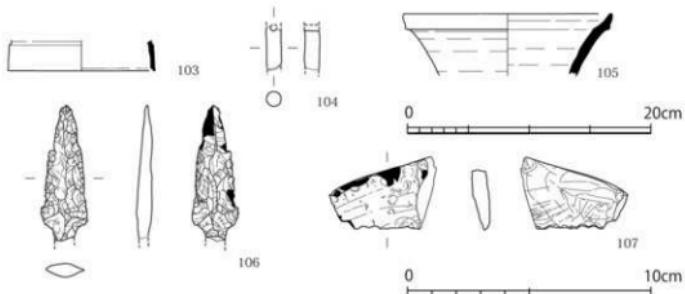


図23 2区遺構出土遺物・2区出土石器実測図

つつ上外方に伸び端部は面をもつ。波状文が施されている。89は口径(復原)12.0cm、88と同様口縁部は内湾しつつ上外方に伸び端部は外にふくらむ面をもつ。90～93は小型壺、3点とも口頸部、底部は欠損している。90は体部最大径(復原)13.7cmを測り、体部外面中位に2条の沈線で区画されたエリアに波状文が施されている。外面は自然釉が分厚く残っている。91は体部最大径(復原)12.6cmを測り、体部中位に浅い2条の沈線で区画に列点文が施されている。胎土は粗く粒径2mm前後の長石を多く含む。92は壺の頸部で口縁端部及び体部は欠損している。頸部径(復原)12.4cmで、大きさに比べ器壁が2cm前後あり、胎土も長石を多く含み粗い。93は頸部径(復原)9.0cm、体部最大径(復原)16.5cmを測るやや扁平な球形の体部をもつ。体部外面下半分は平行タタキが残る。上半部は細かいカキ目調整が施されており、タタキ目は消されている。内面は主に底部付近に同心円當て具痕が残る。94は壺、口頸部は欠損している。頸部径(復原)11.2cm、体部最大径(復原)19.8cmを測る球形の体部をもつ。外面下半部は平行タタキが残っているが、上半部はナデで仕上げられている。内面の當て具痕もナデ消されている。95は小型壺型甌の口縁部、口径(復原)11.0cm、器高(残存)3.4cmをはかり、頸部に波状文がみられる。96は口縁部と底部が欠損しているが、小型壺か甌を模した器形で筒型器台の上部と思われる。体部は横方向に五つの区画に分けられ、一段置きに波状文が施されている。波状文は頸部にもわずかながら認められる。97～100は甌の口頸部、4点共に体部は欠損している。97は小片で口径は復元できなかったが、形状は99と同様で、口縁部は内湾しつつ上外方に伸び、端部は面を成しさら上に肥厚する。98は口径(復原)25.0cmを測る。口縁部は上外方に伸び端部は面を成し、さらに上下に肥厚している。頸部外面はカキ目調整で仕上げられている。99は口径(復原)21.0cmを測る。口縁部は内湾しつつ上外方に伸び、端部は面を成しさら上に肥厚する。100は口径(復原)18.0cmを測り、口縁部は内湾しつつ上外方に伸び端部は面を成す。101は高杯型器台の杯部で、口縁端部は欠損しているが口縁付近の最大径は(復原)25.8cmを測る。外面は沈線や稜線で区画されたエリアに波状文が施されている。102は堤瓶の口縁部で口径4.4cmを測る。口縁部は上外方にまっすぐ伸び端部は丸く終わる。わずかに残る体部にはカキ目調整が残る。

図21の蓋杯、高杯の形状や詳細から、これらの須恵器の時期はI型式5段階、5世紀後半に相当すると思われる。図化できた器種は数少ないが、蓋杯・高杯のほかに壺・甌・器台・堤瓶・甌などの器種を確認できた。なかでも筒型器台と高杯型器台を確認できたのは注目できる。

壺は複数個体確認できたが、特に壺についての特徴だが、同時期の陶邑産の資料に比べて器壁が厚いものや胎土が粗いもの等が存在していたことである。このことは東田辺遺跡では、さまざまな生産地の須恵器が混在している可能性をしめしているといえよう。

#### 遺構出土(図23)

103・104は遺構149から出土した。103は須恵器杯蓋、口径(復原)12.0cm、残存高2.5cmを測る。天井部との境に断面三角形のやや尖る稜が残る。104は上師質の有孔土錘か。平均径1.2cm、一方の孔の一部が残存している。

105は、遺構134から出土した須恵器甌の口頸部、口径(復原)17.0cmを測る。口縁部は上外方に伸び端部は上方にわずかに肥厚し、外側に面をもつ。

#### 石製品(図23)

106はサヌカイト製打製石錐、地山直上で出土した。残存長5.6cm、最大幅1.8cmを測る凸基有茎式石錐である。107はサヌカイト製横長の剥片、一面は自然面が残り、両端は折損している。残存長4.4cm、最大幅3.0cmを測る。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 土壤分析

#### 第1項 はじめに

本遺跡調査地の堆積物が過去の地震動によって変形している可能性が現地調査の断面観察で注意され、その存否を確認するため、不攪乱試料の垂直断面の内眼観察、昼光写真画像の検討をふまえ、軟X線写真の判読を行った。

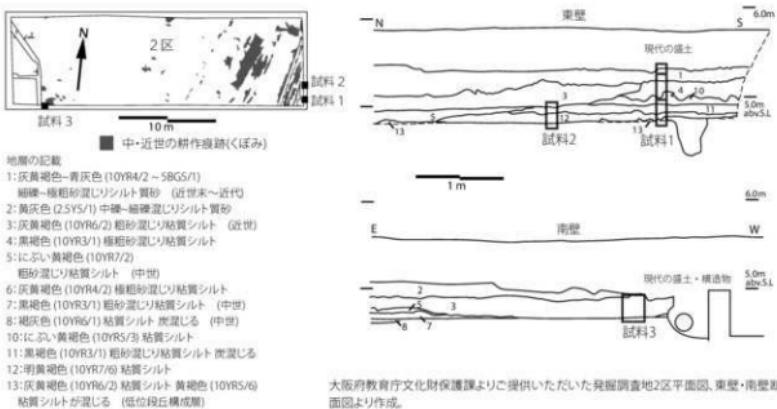
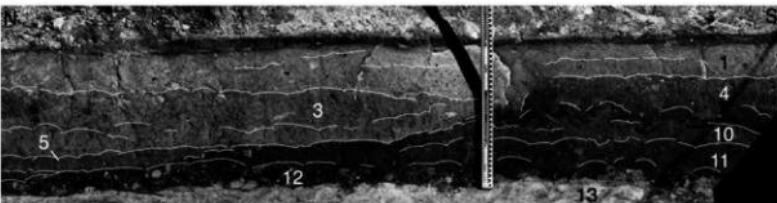


図24 不攪乱試料1～3の採取位置と層準

堆積物中の変形構造が地震動によることをほぼ確実に判定できるのは、振動による噴砂現象などの液状化や脱水の特徴だが、累重する複数の地層にわたって粘塑性・流動変形、脆性破壊の応力が比較的短時間・広範囲に異なる方向にくりかえし加わったことを示す構造も地震動による可能性は高い。不攪乱試料の軟X線写真画像は、これらの多様な変形を予察的に検討する方法の一つとして、限界はあるが利用できると思われる。



写真的範囲は図24東壁の断面図とほぼ同じ。図中の数字は層番号。スケールの高さ73cm。写真是大阪府教育庁文化財保護課よりご提供を受けた。

図25 東壁断面の層界に見られる凸面の連続

## 第2項 不搅乱試料と観察方法

試料は本調査地2区の東壁南部の2か所と、南壁西端部の1か所で採取された。これらの位置と採取標準を図24に示す。東壁の南端寄りの試料を1、これより北に約1.2m隔たった地点の試料を2、南壁南端部の試料を3と付番した。大阪府教育庁文化財保護課よりご提供いただいたこれらの試料は、より大きな連続試料であったが、残念ながら軟X線写真撮影装置のサイズ制限のため、試料1と3はそれぞれ3分割され、観察には不都合だったが、発掘調査者からご提供頂いた写真などで観察結果をおぎなった。

試料はいずれも調査掘削底の更新統、低位段丘堆積物からなる第13層上面直下を下端にして、試料1は上位75cmの垂直範囲に、中世、近世、近現代の堆積物を含む。試料2は掘削底付近の上位25cmの垂直範囲で、中世、近世の堆積物を含む。試料3は掘削底の上位30cmで、ほぼ近世の堆積物で占められる。観察は、上述のように分割され、25×10cm、厚さ1cmの板状に成形された試料で行った。軟X線写真は、これらの試料を同サイズのアクリルケースに封入し、その下に増感紙と印画紙を敷いて、上方約60～70cmから管電圧40～45kV、管電流約4mAで、50秒～1分20秒照射して撮影した。写真はフラットベッド・スキャナで600dpiのデジタル画像にし、HDR処理で明度幅の縮減を修正するとともに、分割された試料境界部分の明度差を調整した。X線写真は、堆積物や土壤の試料では、その厚みに含まれる物体・物質の形状やパターンが重複し、色調も失われる所以、実物との頻繁な対照作業を、コンピュータ上の軟X線写真と0.5mm(粗い)中粒砂で識別できる程度の昼光写真とて行った。

## 第3項 観察結果

### (1) 2区東壁にみられる変形構造

冒頭に述べたように、すでに調査地2区東壁の断面観察で地層の変形がみとめられているので、その特徴についてあらかじめ述べる。図25は図24で示した断面図とほぼ同じ水平範囲の写真で、層界をトレースしたものである。遺跡基盤の直上に載る第12層上面から、より上位の第3・4層上面までの層界のほとんどは、幅15～30cm、高さ5cmまでの緩やかな上凸の曲線の連続で構成されている。また、第3層と第5層に上面では、上述の幅の狭い上凸曲線の連続が、幅約1.5mのさらに大きな上凸の曲線を構成しているように見える。これらの上凸曲線を上下で比較すると、いくつかは左右にずれたり、より幅の狭い起伏に分節しているが、おおむね水平位置が揃う部分が多い。第13層上面の形状は第12層上面あるいは第11層上面の起伏と不調和な部分が多く、写真左半の第11層上面は第5層と第12層の起伏とやや位相がずれているが、全体として同時に生じた変形と考えられる。採取試料の観察では、上述のマクロスケールの構造と関連する局所的な内部構造の特徴に注意をはらった。

### (2) 人為堆積層の層相

図25断面写真的最下部でも、基盤の第13層直上には同層から掘り上げられたと考えられる黄灰色の堆積物断片が多数分布するが、試料中にも軟X線写真のトレース図で示したような、人為的な掘削・搅拌によって生じたと考えられる長径数cm以下、亜角～角状の堆積物断片が多く含まれていた。これらは盛土材料と考えられる。いっぽう、明確な土壤粒團構造を示さず、よく搅拌された層相をなす堆積層もあり、畑地および水田作土と考えられる。試料中の堆積層で、加工されていない堆積物は、掘削底をなす第13層のみであった。人為的な堆積層の層界がなす物質の不連続も変形構造の発達に影響すると思われる。

### (3) 試料1の変形構造

試料1下部試料(図26)では、第13層と第12層中部までは、低角度、南上がりの直線的な微小せん断帯が伸び、これに沿う同方向の応力で押し曲げられた棱管と堆積物断片の配向がみとめられる。第

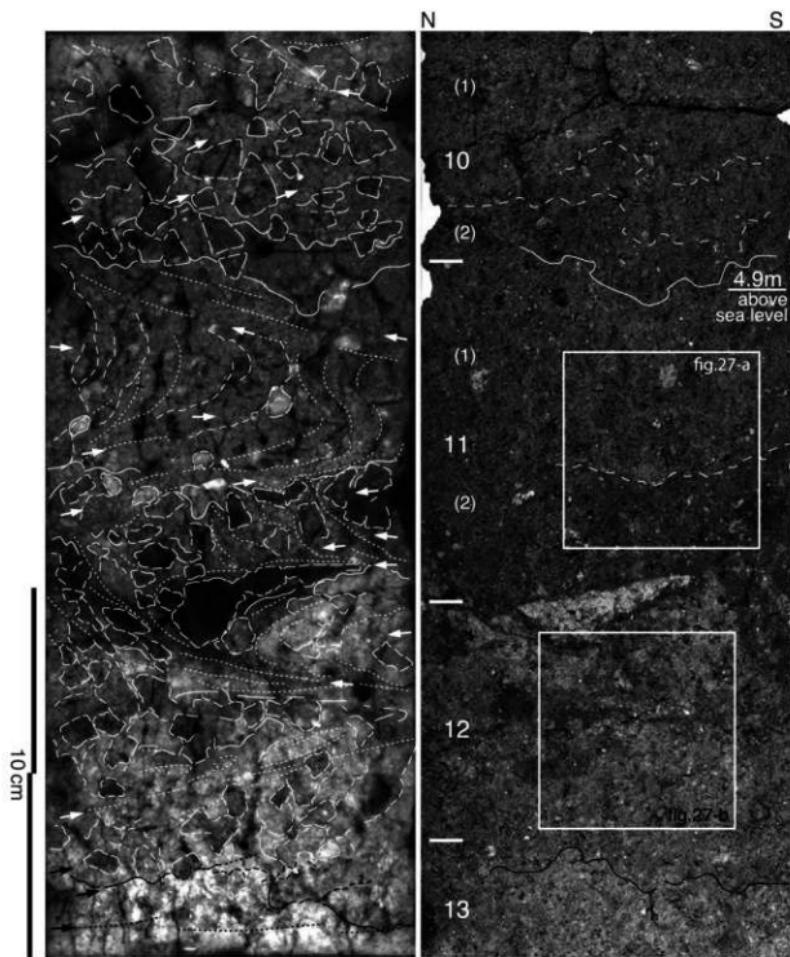


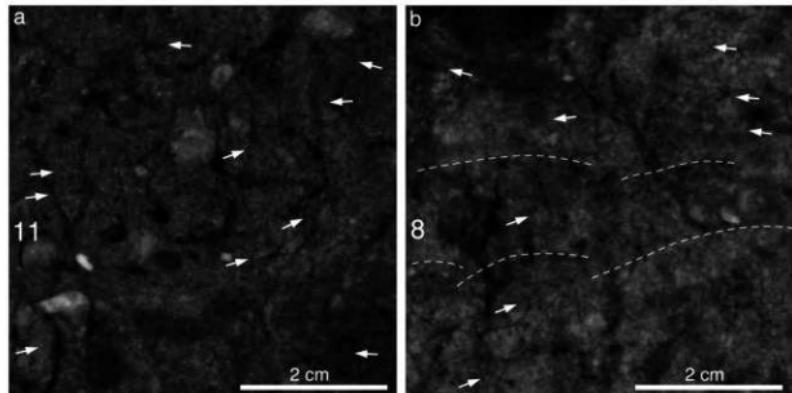
図26の左側の数字は現地調査の層名。両写真的実線は層境界。図27の数X線写真範囲。数X線写真的太く粗い破線は堆積物破片(あるいは耕作土の粒群)の輪郭、相対的に暗い(混成分に富む)もの的一部分のみトレース。細く粗い破線はおもに種管。細かい破線は茎みやせん断を示す線状の特徴。矢印は比較的明確なせん断帯。矢印の方向は局所応力の主方向を示す。10(1):暗灰色の細縞まじり砂質シルト。輪郭の不明瞭な堆積物断片(粒群)からなる。10(2):有機物に富む暗灰色の砂質シルト、粘土質粗粒シルト断片(長径2cm)を多く含む。11(1):暗灰色のわずかに細確を含む砂質粘土質シルト。堆積時には安定した粒団構造はなかったと考えられ、攪拌された土壠の層相を示す。11(2):全体に暗灰色～黒褐色。有機物に富む粘土質砂質シルト断片(長径1.5cm)と砂質シルトの基質。12:下位層断片(長径4cm)からなり断片間に11(2)堆積物をはさむ。13:明黄灰色の砂質粘土質シルト。土地改変以前の初生の土壤構造を残す。

図26 東壁試料1下部の図26の左側の数字は現地調査の層名。両写真的実線は層境界。図27の数X線写真範囲。数X線写真的太く粗い破線は堆積物破片(あるいは耕作土の粒群)の輪郭、相対的に暗い(混成分に富む)もの的一部分のみトレース。細く粗い破線はおもに種管。細かい破線は茎みやせん断を示す線状の特徴。矢印は比較的明確なせん断帯。矢印の方向は局所応力の主方向を示す。10(1):暗灰色の細縞まじり砂質シルト。輪郭の不明瞭な堆積物断片(粒群)からなる。10(2):有機物に富む暗灰色の砂質シルト、粘土質粗粒シルト断片(長径2cm)を多く含む。11(1):暗灰色のわずかに細確を含む砂質粘土質シルト。堆積時には安定した粒団構造はなかったと考えられ、攪拌された土壠の層相を示す。11(2):全体に暗灰色～黒褐色。有機物に富む粘土質砂質シルト断片(長径1.5cm)と砂質シルトの基質。12:下位層断片(長径4cm)からなり断片間に11(2)堆積物をはさむ。13:明黄灰色の砂質粘土質シルト。土地改変以前の初生の土壤構造を残す。

12層上部には、北向きに伏臥褶曲状に押された部分があり、その前方には、下底のせん断帯から北向きに反り上がった葉状構造が発達している(図27b)。第11層下部(図26、11(2))には、黒褐色の粘土質シルトの断片が集積しており、その直上に比較的明瞭なせん断帯を挟み、その上位の堆積物は南向きに押されたことが、古い棲管と根成孔隙の歪みで判断できる(図27a)。この歪みの主応力によつて生じたと考えられる微小せん断帯が数か所にみとめられる。この上位層準第11層最上部(図26、11(2))では、下位の変形パターンを逆方向に切るようなかたちで、微小せん断帯が北上がりに伸びるが、第10層下部(同図、10(2))では南上がりで堆積物断片を横切る微小せん断帯が伸びる。試料最上部(同図、10(1))には北向きの主応力によると推測される微小せん断帯がみとめられる。試料1中部(図28)の第10層には、南寄りに下凸の微小せん断帯あるいはせん断帯とともになう葉状構造が分布する。その伸長する形とおよそ平行に、本層上端は第4層最下部(同図、4(2))に北上がりの微小せん断帯が発達している。第10層の棲管が截頭されたのは、第4層の堆積時であろう。第4層中には、北向きに歪められた棲管と根成孔隙とともに、ほぼ水平の微小せん断帯がみとめられる。この歪みの最上部は上凸で、第4層上面の形状を作っているはずだが、最上部(同図、4(1))では水平の微小せん断面のみがみとめられる。第1層中には歪みの特徴はほとんど見られない。試料1上部(図29)の第1層中では、初生の葉理状構造とややまぎらわしいが、微小せん断帯は分布しないようである。

#### (4) 試料2の変形構造

本試料(図30)下部では第13層の直上から第11層の上部(同図、11(1))までの範囲に北側あるいは北側下方に凸な歪んだ棲管、根成孔隙、堆積物断片の配列がみとめられる。第12層では、第13層上端付近のせん断帯とともになう、北向きで緩やかに下凸の歪みとほぼ水平に伸びる微小せん断帯が重なっている。このような重なりは第11層中部付近まで見られ、第11層上部(同図、11(1))より北側上方では、南上がりの微小せん断帯が重なり、上凸の歪みをなして第3層との層界を形作っている。南上がりの微小せん断帯にはやや急角度をなすものもある。



画像範囲は、図26概光写真中の枠で示す。a:第11層中位の堆積層境界(図26概光写真の破線)直上で、5字形をなすパターンが画面下部から左上にかけて見られる。矢印は比較的明瞭なせん断帯付近の主応力方向を示す。b:堆積物断片が散布・集積する第12層内部の上凸面群と低角度のせん断帯。左隣の上凸面が、右上方に伸びる微細せん断帯を挟んで右側の上凸面に衝上している。画面上部は上位堆積物を左にすらす局所応力を示す微細せん断帯が分布する。堆積物断片が歪みのパターンに調和的な配向をなす部分と、断片を微小せん断帯が横断する部分がある。

図27 東壁試料1下部の軟X線写真拡大画像

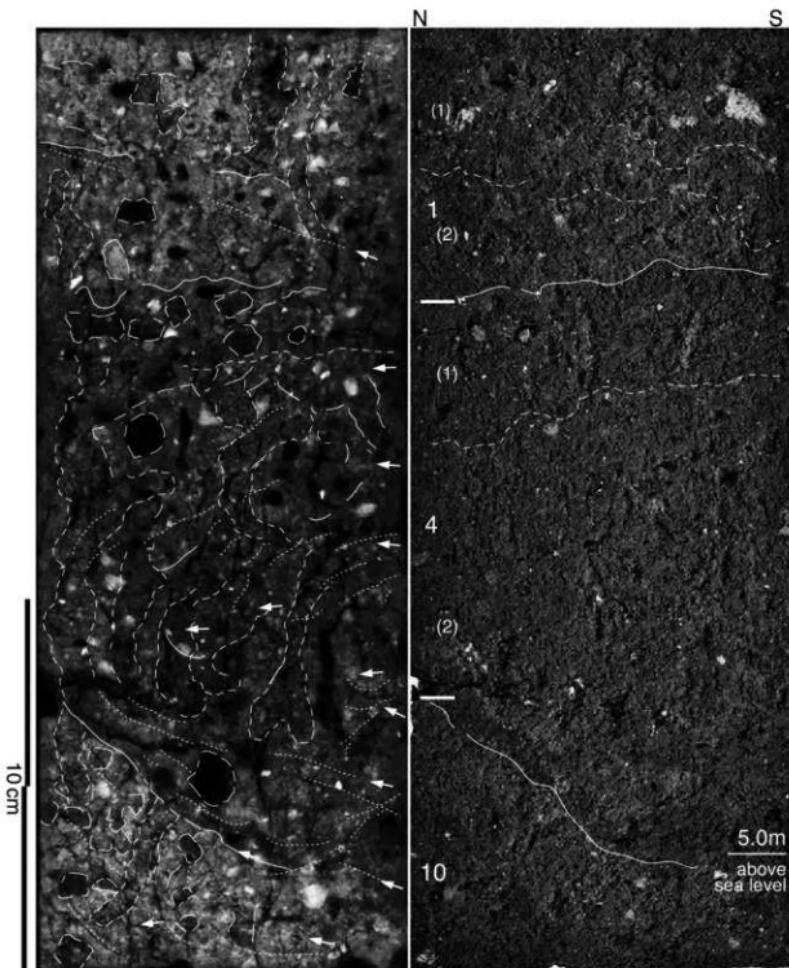


図28 東壁試料1中部の昼光写真と歎X線写真  
 曜光写真左辺の数字は現地調査の層名。歎写真的実線は層境界、歎光写真的破綻は層内の組成が異なる堆積物の境界を示す。歎X線写真的太く粗い破綻は堆積物破片(あるいは耕作土の粒回)の輪郭。細く粗い破綻はおもに管状、細かい破綻は歪みやせん断を示す線状の特徴。矢印は比較的明瞭なせん断帯付近の主応力方向を示す。(1):暗緑灰色の砂質粘土質シルト、不整形な粒回(△長径数mm)が不規則なパッキングをなす。根成孔隙と管状が比較的高密度に分布する。粘土質シルト断片(△長径1cm)がわずかに点在する。(2):下位の第4層上部堆積物との混合層。(I):灰色の細縫まじり砂質シルト、下位(2)に比べわざわざに暗色、堆積物断片(△長径1cm)が不規則なパッキングをなす。粘土に富む(1)堆積物で充填された管状とための根成孔隙が分布する。酸化鉄(III)の沈着が管状と根成孔隙内で顕著にみとめらる。(2):灰色の細縫まじり砂質シルト。不整形な粒回(△長径数mm)が不規則なパッキングをなす。管状と根の孔隙が上下の層に比べやや高密度に分布する。下底付近は有機物に富む粘土成分が多い。本層準より上位では、遺跡基盤をなす明灰黄色の砂質シルト断片(△長径数mm)が点在し、その一部は基質とよく混合する。(10):極細粒の中縫・細縫まじり砂質シルト。全体に砂がちだが、管状や根成孔隙の充填堆積物は有機物と粘土に富む。粒回(△長径数mm)の粒回があり大きな粒回(長径1~3cm)をなす。

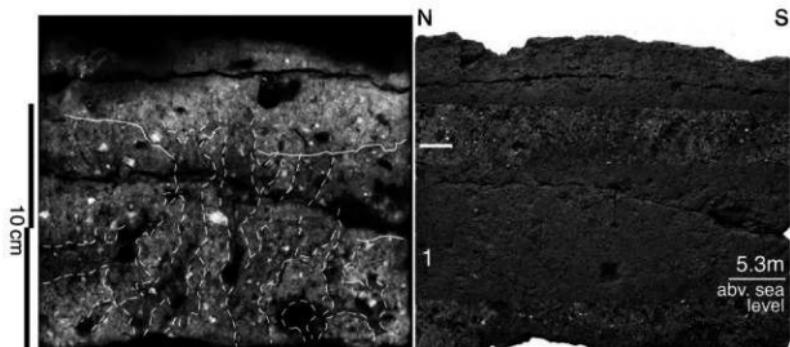
図28 東壁試料1中部の昼光写真と歎X線写真

## (5) 試料3の変形構造

南断面の本試料(図31)はほぼ全体を第3層堆積物が占める。下部・中部の軟X線写真では試料1・2と同様、水平ないしは低角度の微小せん断帯とそれらに平行な主応力で生じたと推測される歪みがみとめられたが、堆積物の歪みについては、棲管や根成孔隙とともに、より細粒堆積物と接した細礫・砂粒子の配列にも注目した。試料最下部西端の第13層最上部とその直上第3層(同図、3(4))には上凸の歪みと東上がりの微小せん断帯、下部(同図、3(4))その上位には逆S字状に屈曲した流線状の歪みがみとめられる。軟X線写真左半には西上がりの比較的明瞭に伸びるせん断帯がみとめられ、西押しの応力が推測される。試料中部では、おむね東向き主応力の卓越を示唆する側方への歪み、粗粒物質の配列がみとめられる。中部・上部(同図、3(2))にかけては低角度で東上がりのせん断帯が比較的長く伸びている。

試料上部の第3層最上部(同図、(1))と第2層には、下凸の堆積物粒子の配列とともに、同じパターンの亀裂がみとめられる。この変形は、より下位の水平方向の主応力とは異質で、最近の土木工事にともなう荷重痕と判断した。

いっぽう、本試料採取地点の近傍では、写真2に示すような塑性溝をともなう変形構造が、第13層上面で検出されている。暗色部分は、試料3下部に分布する第11層堆積物の断片とより砂粒の少ない粘土質シルトで、明色部分は、砂質粘土質シルトからなる第13層堆積物である。後者が前者を取り巻き、砂粒の少ない粘土質シルトを引きずるかたちで塑性流动した結果生じたように見える。このような含水塑性変形は上述した試料の断面では見あたらず、それらとは堆積物の物性やその内部質点の移動様式がかなり異なる。ただし、この変形構造の分布域は限られており、より上位堆積物の変形時に、その分布域に限って堆積物の含水比が高ければ生じるかもしれないが、より古い年代の変形である可能性もある。



第1層の上半とその上位の近・現代盛土下底の耕作土。昼光写真左辺の数字は現地調査の層名。画像の上部と下辺部は花粉分析試料として失われていたので、撮影条件の異なる画像で補っている。軟X線写真的実線は組成の異なる堆積物の境界。細い破線は棲管と、充填あるいは未充填の根成孔隙で、昼光写真でみとめられる粘土がちの堆積物はおよそこの領域に分布する。この層準では歪みの特徴や階級せん断帯はみとめられない。1:暗灰色の細礫まじり粘土質砂質シルト。棲管や根成孔隙内には粘土成分が多い。試料最上部は暗灰色の砂まじり粘土質シルトで砂成分は比較的細粒。幅2mmをこえる粗孔隙と粒団の発達はなく、堅状。本層下底で第1層の棲管と根成孔隙が截頭されている。

図29 東壁試料1上部の昼光写真と軟X線写真

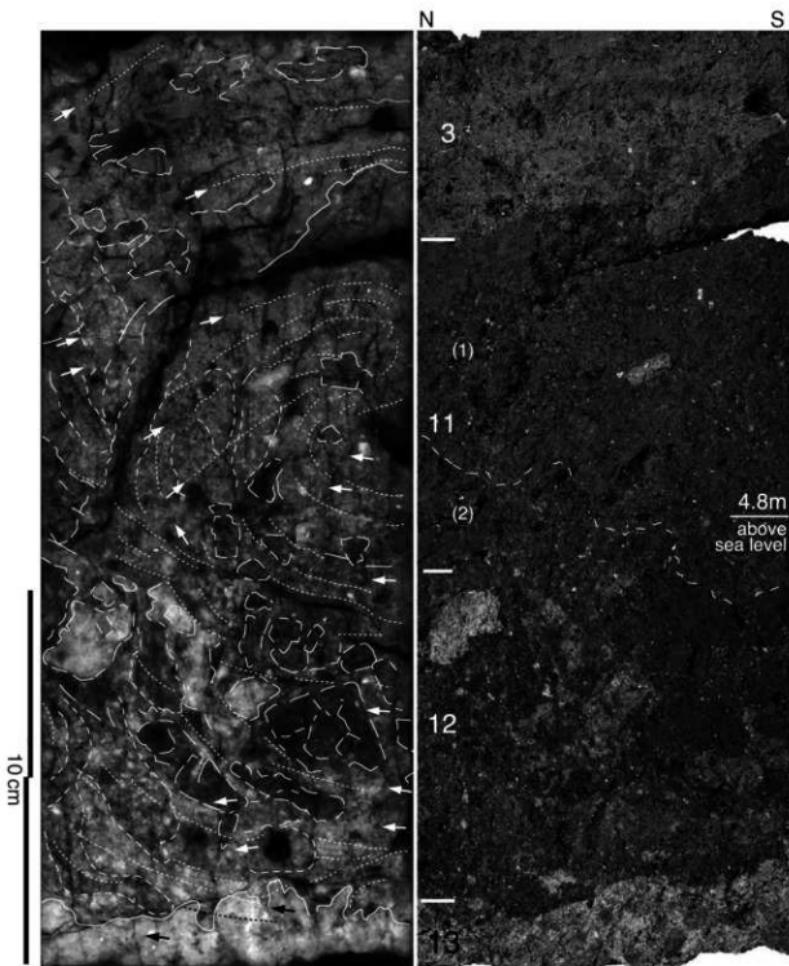


図30 東壁試料2の日光写真と軟X線写真  
 曜光写真左辺の数字は現地調査の層名。両写真的実線は層境界。曜光写真の破線は層内の組成が異なる堆積物の境界を示す。軟X線写真的太く粗い破線は堆積物断片(あるいは耕作土の粒團)の輪郭一部のみトレース。細く粗い破線はおもに棲管。細かい破線は重みやせん断を示す線状の特徴。矢印は比較的明瞭なせん断帶付近の主応力方向を示す。3:緑灰色のわずかに細レギと極粗粒砂を含む砂質シルト断片と、暗色で砂成分の少ない粘土質シルト断片からなる。ともに長径3cm以下。綿密めた盛土と考えられる。11(1):暗褐色のわざかに細繊を含む砂質粘土質シルト。棲管と消失した上位層準から発達したと考えられる細い根成孔隙が多く分布する。黒褐色・暗灰色の粘土質シルト断片が点在する。11(2):同層(1)とはまったく真なり、おもに黒褐色と暗灰色で、粘土質シルト断片(長径4cm)で構成される。少數の12の堆積物断片と、棲管が分布する。を充填する上位層堆積物(暗灰色の粘土質シルト)が分布する。12:13の堆積物断片(長径4cm)からなり断片間に11(2)堆積物をはさむ。棲管は上位層堆積物(暗灰色の粘土質シルト)で充填されている。13:明黄灰色の砂質粘土質シルト。初生の土壤構造を残す。

図30 東壁試料2の日光写真と軟X線写真

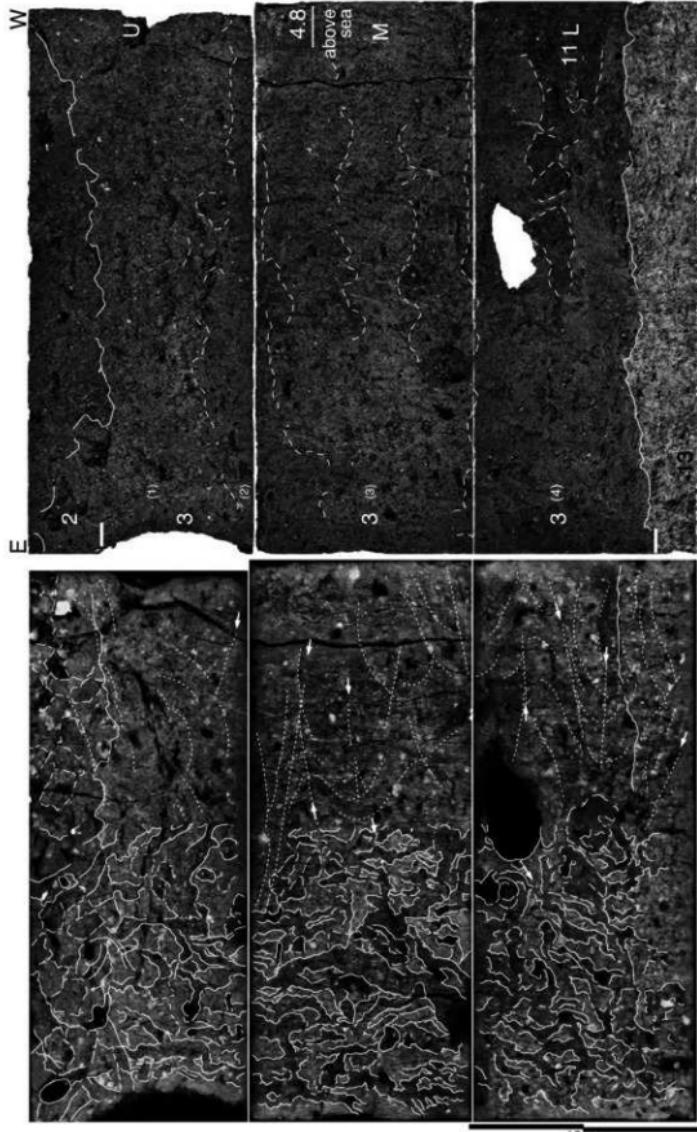


図 31 南壁試料 3 の層光写真と軟X線写真

#### 第4項 考察

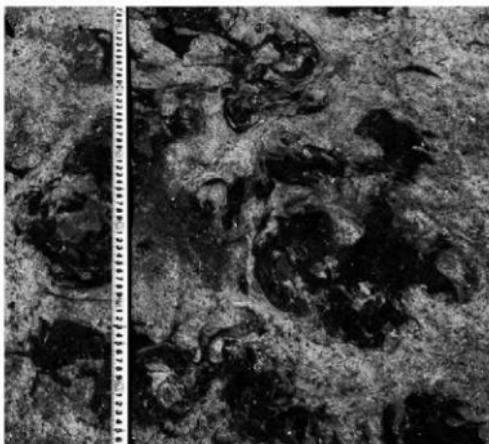
調査地断面の層界に見られるような凸面の連続は部分的に不調和な何枚かの地層があるものの、全体として地層が水平方向に一時の外力で圧縮されて生じた座屈と考えられる。また、軟X線写真で確かめられた、おもに水平の応力による一群の歪みの上部は上凸になる傾向があり、凸部のたわみが、荷重のより小さい上方によく発達するらしいことは直感的に了解できる。数10cmの垂直範囲内の複数堆積層で同時にこの変形を生じさせるのに十分な外力が地震による地表付近の水平地震動であった可能性は高い。図25の層界の外観と軟X線写真で、この変形は第1層下部層準ではみとめられないでの、第3層の堆積後、第1層下部の堆積中に生じたと判断される。発掘調査で知られた近世・近代という

第1層の相対年代から、1854年12月24日に発生した安政南海地震による変形の可能性がある。宇佐美(1987)によると、同地震による大阪での震度はV～VIで、これに相当する加速度と堆積物のせん断強度との関係や、より広範囲での微小せん断の速度分布はあるいは歪み量の分布はなお検討を要する。1707年10月28日の宝永地震(大阪での震度はおおむねVI)(宇佐美、前掲)すでに変形が生じていた可能性もある。

構造地質学で議論される固結岩体内の高い圧力・応力条件下における弾塑性体の座屈褶曲変形モデルが、地表以下数m以内の未固結・砂泥混合堆積物に適用できるかどうかも課題として残る。褶曲が、より波長の短い相似的な褶曲を含む現象は、佐藤(2003)によって紹介されており、材料工学で座屈の「分岐」として扱われる現象(例えば池田・室田2001)に相当すると考えられる。

#### 参考文献

- 池田清宏・室田一雄(2001)「構造系の座屈と分岐」、コロナ社、201p.
- 宇佐美龍夫(1987)「新編日本被害地震総覧」、東京大学出版会、pp.69-74, 128-133.
- 佐藤正(2003)「地質・土木技術者のための地質構造解析20講」、近未来社、pp.253-270.



明色側が暗色側に向かって凸型あるいは瘤状に接している部分が多く、暗色側で角張った輪郭をなす部分は、第1層の盛土を構成する堆積物断片で、明るい灰色の泥はより暗い集塊の外側に分布するので、屈性流動変形時に生じた混合物と思われる。写真は大阪府教育庁文化財保護課よりご提供を受けた。

写真2 南壁試料3採取付近、第13層上面の変形構造

## 第2節 花粉分析

### 第1項 分析試料

分析試料は、軟X線写真を撮影した東壁試料1上部を使用した。

### 第2項 分析方法

#### (1) 概要

遺跡を覆う堆積物から花粉・胞子(化石)を抽出し、堆積時の古植生(栽培を含む)、堆積環境、古気候(気温、降水量など)などを推定する。周辺地域におけるデータの蓄積により、堆積時期の推定(花粉層序学的な検討)を行うことも可能となる。花粉の粒径(数～100 μm程度)と同じ、あるいは粘土から極細砂サイズで、花粉含有量の多い腐植に富む黒色を帯びた水成堆積物が対象となる。しかし、処理重量を増やすことにより、より粒径の粗い堆積物や、腐植に乏しい堆積物、古土壤も分析対象になる。

花粉の分類は属・科のレベルで行うのが普通であり、栽培に関連した分類でも種のレベルまで細分することはできない。また、クスノキ科のように処理中に花粉が溶けてしまい、検出できない種類もある。このようなことから、目的によってプランツ・オーパール分析との併用が有効な場合がある。

#### (2) 意義

植生は、気候や土地条件などの変化のほか、人間活動による自然への干渉(開墾・植栽など)によつても変化する。また、植生は様々な段階を経て、環境に最も適応した「極相」へと遷移していく。植生の変化は花粉の絶対量に反映され、水系や大気系を経由して堆積物粒子とともに堆積し、最終的に堆積物中の花粉群集(種類構成と相対量)の変化として現れる。したがって花粉群集の変化から、古植生あるいは土地条件(堆積環境を含む)、古気候などの推定を行うことができる。

ただし、花粉の分類は属・科のレベルで行うことが普通であり、気候・植生推定に重要な種でありながら判別できない種もある。更にクスノキ科のように処理中に花粉が溶けてしまい検出できない種類もあるなど、必ずしも万能なものではない。

#### (3) 分析処理法

##### ①分析試料

試料1(2区東壁)の第1層について分析を行った。試料をさらに分断し上位(分析No.1)と下位(分析No.2)に分け花粉分析用試料の採取を行った。



図32 花粉分析処理フロー

一般に分析に供する試料は、シルト又は粘土で、その量は10～200g(湿潤重量)である。試料は花粉の形状を保持するため湿潤状態のまま使用する。

分析に供する試料の採取間隔は、堆積層の状態と目的によって数cmから数mと異なるが、遺跡調査の場合は、一般に遺物に基づく土層区分に対応した採取間隔をとることが多い。

##### ②分析処理

分析処理の手順を、図32に示す。1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

表2 花粉組成表

調査区		2区		
試料No.		東壁試料1		
分析No.		1	2	
3	<i>Podocarpus</i>	マキ属	1	0.5%
10	<i>Tsuga</i>	ツガ属	17	8.1%
21	<i>Pinus (Diploxylon)</i>	マツ属(複維管束亜属)	170	80.6%
30	<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	1	0.5%
32	<i>Cryptomeria</i>	スギ属	4	1.9%
71	<i>Carpinus Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	2	0.9%
73	<i>Corylus</i>	ハシバミ属		2 6.5%
75	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	0.5%
83	<i>Quercus</i>	コナラ亜属	9	4.3%
84	<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属	3	1.4%
92	<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	2	0.9%
141	<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	1	0.5%
311	Gramineae(<40)	イネ科(40ミクロン未満)	94	44.5%
312	Gramineae(>40)	イネ科(40ミクロン以上)	315	149.3%
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	1.4%
420	<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	3	1.4%
422	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	6	2.8%
430	Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	0.5%
461	Cruciferae	アブラナ科	27	12.8%
542	<i>Gossypium</i>	ワタ属	31	14.7%
557	<i>Rotala</i>	カキシガサ属	1	0.5%
563	<i>Epilobium-Ludwigia</i>	アカバナ属-ミズユキノシタ属	1	0.5%
636	<i>Plantago</i>	オオバコ属	1	0.5%
710	Carduoideae	キク亜科	4	1.9%
712	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		1 3.2%
720	Cichorioideae	タンボボ亜科	3	1.4%
842	Subgenus <i>Sceptridium</i>	フユノハナラビ亜属	1	0.5%
875	<i>Davallia</i>	シノブ属	3	1.4%
881	Pteridaceae	イモトソウ科	3	1.4%
882	<i>Ceratopteris</i>	ミズワラビ属	3	1.4%
886	Aspid.-Aspl.	オシダ科-チャセンシダ科	18	8.5%
891	Polypodiaceae	ウラボシ科	1	0.5%
894	MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	27	12.8%
899	TRILATE-TYPE-SPORE	三條溝胞子	60	28.4%
木本(針葉樹)			193	23.6%
木本(広葉樹)			18	2.2%
草本・藤本			490	60.0%
胞子			116	14.2%
総数			817	211
含有量(粒数/g)			824	265

左よりカウント粒数、百分率

## ③顕微鏡による検定・計数

抽出した花粉はグリセリンゼリーと混合してスライドグラス上に滴下し、カバーガラスをかけて封入してプレパラートとする。各試料につき2~3枚のプレパラートを作成する。プレパラートを光学顕微鏡下の400~1000倍率で観察し、メカニカルステージによる帯分析で通常木本花粉で100~250個の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉・胞子の検定、計数も行う。

## (4) 解析法

花粉分析結果の解析は以下の手順で進める。

- ①花粉の種類ごとの出現率(パーセント表示)計算とダイアグラムの作成(場合によって、種類ごとに単位重量あたりの花粉粒数を算出しダイアグラムを作成)
- ②各地点における花粉消長パターンの読みとりと局地花粉帶の設定
- ③地層対比や古植生・古気候の復元

### 第3項 花粉分析結果

#### (1) 花粉化石の含有状況

花粉分析を行った結果、全ての試料から花粉・胞子化石が検出できた。しかし、分析No.2では花粉・胞子含有量が少なく、統計処理に十分な量の木本花粉化石が検出できなかった。

#### (2) 検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は表2に示す26種類であった。このほか、6種類（形態分類群を除く）の胞子化石を検出した。これらのうち、花粉組成を特徴付ける種類は、以下に示すようなものであった。

##### ① 卓越木本花粉

マツ属（複維管束亞属）

##### ② 卓越草本花粉・胞子（栽培種及び栽培の可能性のあるものを含まない）

イネ科（40ミクロン未満）

##### ③ 栽培種花粉（栽培の可能性のあるものを含む）

イネ科（40ミクロン以上）、ソバ属、ワタ属

#### (3) イネ科の細分について

イネ科花粉を粒径から、40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分した。

稲作が行われる前の自然堆積物では、イネ科（40ミクロン未満）花粉が高率となることはあるが、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範に行われたとされる弥生時代以降においては、自然堆積物でもイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率となることが多くなる。更に稲作遺構での分析結果では、ほとんどの場合イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で検出される。

一方、図33（中村1974）に示すように、イネ科（40ミクロン以上）花粉にはイネ属（*Oryza*）を含んでいるが、すべてがイネ属であるわけではない。

これらの状況証拠と事実から、弥生時代以降に高率で検出されるイネ科（40ミクロン以上）花粉について、すべてがイネ属に由来するわけではないが、その多くはイネ属に由来すると推測される。

#### (4) 分析結果

分析結果を図34の花粉ダイアグラム、表2の花粉組成表に示す。

花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基準にしている。）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、【総合ダイアグラム】として分類群ごとの割合を示したほか、【粒径ダイアグラム】として分類群ごとに含有量（湿潤試料1g中の粒数）を算出し、変化を示している。

#### (5) 花粉群集の特徴

分析No.2では花粉化石含有量がやや少なく、統計処理に十分な量の木本花粉を検出することができなかつた。

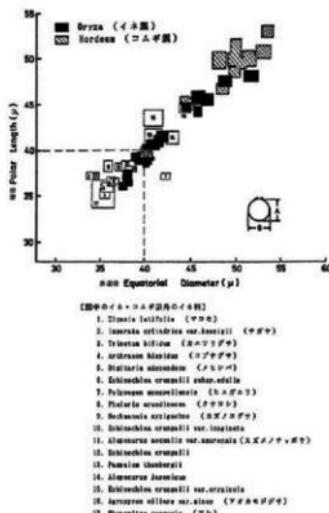
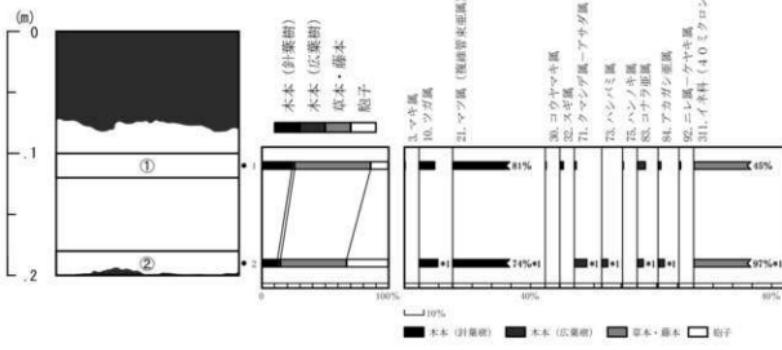
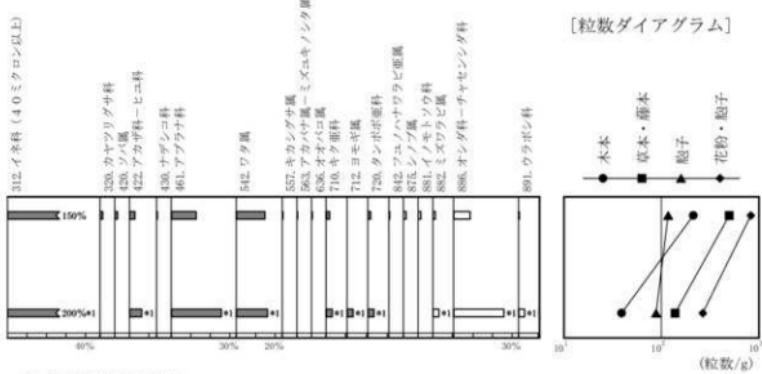


図33 イネ科花粉の粒径比較図

[総合ダイアグラム]



[粒数ダイアグラム]



\*1: 基数が50粒未満のタクサ

図34 花粉ダイアグラム 東壁試料1上部

何れの試料でもマツ属（複維管束亞属）が70%を超える高率を示した。草本花粉ではイネ科（4.0ミクロン以上）が100%を超えるほか、イネ科（4.0ミクロン未満）も40～100%の高率を示し、栽培種であるワタ属も15%程度の出現率を示す。また、上位の試料No.1では栽培種であるソバ属が検出された。このほかアブラナ科が13～26%とやや高率を示す。

#### 第4項 古植生推定

##### (1) 近辺での耕作

分析対象とした第1層は、近世末～近代の耕作土と考えられている。調査地を含む旧南田辺村域では、江戸時代以降明治時代まで水田耕作のほか、ワタやアブラナ科ナタネ、カブが特産品として栽培されて

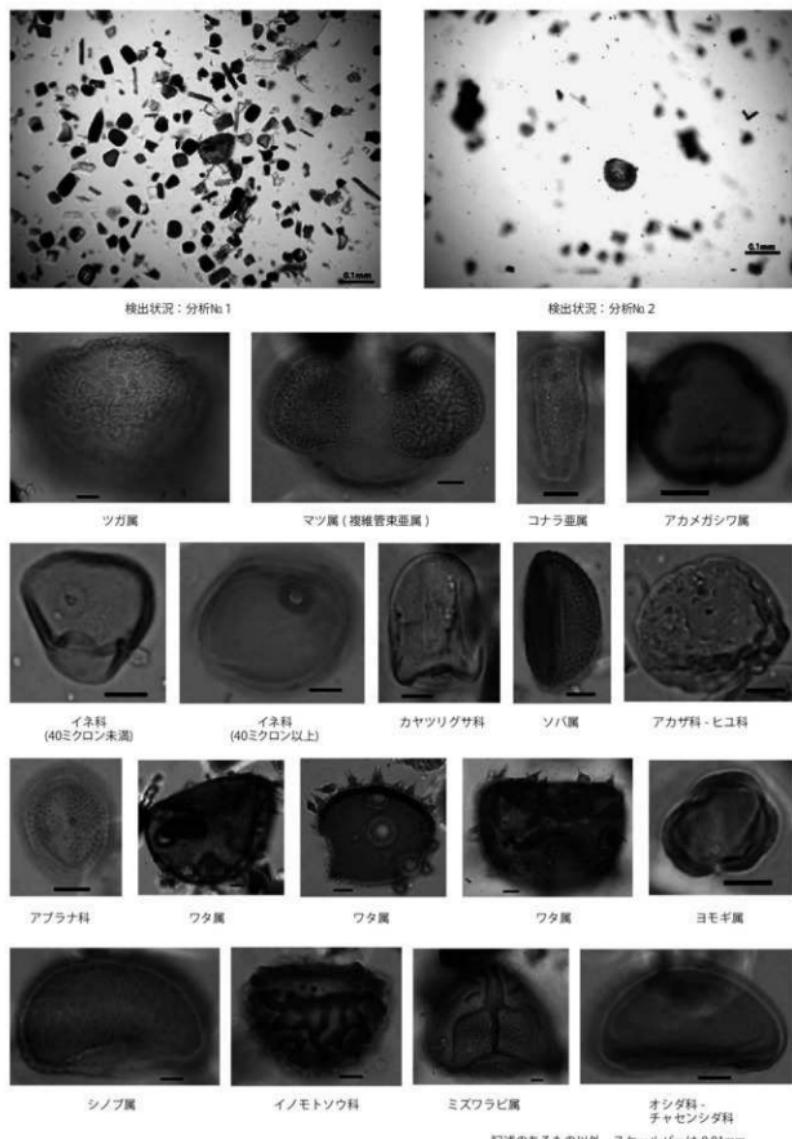


写真3 検出した花粉化石

記述のあるもの以外、スケールバーは 0.01mm

いた（田辺町誌編纂委員会 1925）。今回の花粉分析結果では、イネ（40 ミクロン以上）のほか、ワタ属、ソバ属などの明らかな栽培由来花粉のほか、アブラナ科花粉も比較的多く検出されていた。『田辺町誌』によると、畑の分布が多かった様であるが、元々水田作土であった地を、綿花栽培や菜種（あるいは蕪菁、大根）栽培の為の畑地に転用していったものと考えられる。また、稻作の裏作あるいは畦を利用して蕓麦作が行われていたことが多いようであり、ソバ属花粉はこれに由来するものと考えられる。

## （2）森林植生

大阪平野南部に分布する多くの遺跡で花粉分析が実施されているが、近世以降のデータについては花粉化石の含有量が少なかったことなどにより、対比試料として活用できるデータが豊富とは決して言い難い状態である。

東田辺遺跡に比較的近い地点として松原市三宅西遺跡でのデータ（財団法人大阪市文化財協会 2009）、やや離れた地点として藤井寺市西大井遺跡（川崎地質株式会社 1995）と比較する。両地点共に、今回の分析結果と同様にマツ属（複維管束亜属）が高率を示す。このことは、大阪平野周囲にアカマツ林（薪炭林・里山）が分布していたことを示唆する。また、割合は低いが3地点共に検出されるコナラ亜属やクマシデ属・アサダ属も薪炭林の要素である。同様にアカガシ亜属も3地点共に検出されるが、アカマツなどと混淆していた可能性があるほか、照葉樹林が僅かに残存していた可能性もある。このほか温帯針葉樹種であるツガ属が3地点共に、やや高率を示しており。スギなどと共に山地上部に温帯針葉樹林（中間温帯林）として残存していた可能性が指摘できる。

## 第5項まとめ

花粉分析結果から、第1層（近世～近代耕作土）では、イネのほかソバ、ワタが栽培されていたほか、ナタネ（カブ、ダイコン？）が栽培されていた可能性も指摘できる。

## 参考文献

- 財団法人大阪市文化財協会（2009）大和川下流域における遺跡形成過程の総合調査、三宅西遺跡 - 一般府道住吉八尾線  
外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 分析・総括・観察表編 - (財) 大阪府文化財センター調査報告書、  
189, 409-442, (財) 大阪府文化財センター。
- 大西郁夫・千場英樹・中谷紀子（1990）穴道湖湖底下完新統の花粉群、島根大学地質学研究報告、9, 117-127.
- 川崎地質株式会社（1995）西大井遺跡（93年度調査）における花粉・珪藻分析、西大井遺跡 - 大和川下流東部流域下  
水道事業大井処理場建設に伴う発掘調査報告書、1, 149-174, (財) 大阪府文化財調査研究センター。
- 田辺町誌編纂委員会（1925）第2章農業第2節沿革、田辺町誌、243-246、大阪府東成郡田辺町役場。
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として、第四紀研究、13, 187-197.

## 第5章 総括

### 第1節 まとめ

調査成果について時代順に述べる。

#### 古墳時代中期末

今回の調査では伐根痕といった開発に伴う痕跡が見つかり、また包含層からではあるが須恵器が多く出土した。須恵器は周囲に存在する田辺古墳群が造営された時期と重なる。当遺跡の南東に立地する田辺東之町遺跡では古墳時代の埴輪が出土しており、周辺に古墳時代中期末の集落又は古墳が存在した可能性が高い。伐採痕跡は造営活動のための開発行為であったと考えたい。

#### 中世

最も多くの遺構が残存していた。002 井戸は 14 世紀代である。掘立柱建物 1 の柱穴からは遺物が出土していないが埋土を検討した結果 012 落ち込みと同期であると判断した。012 落ち込みからは瓦器が出土しており中世と考えられる。14 世紀代に調査区を起点として東側に居住域が広がっていたものと推測できる。

数多く検出した小溝群は鋤や鍬による耕作痕跡であり、012 落ち込みを切り 030 柱穴の上部にも形成されていた。掘立柱建物 1 や 002 井戸よりも新しい遺構である。居住域として機能した後、耕作地へと変貌しており、出土遺物からその年代は 14 世紀から 15 世紀の間と考えられる。

#### 近世

中世から続く耕作地が広がっており畦畔も踏襲されていたと考えられる。基盤層上面や壁面において地震痕跡と考えられる土層の変形構造が認められた。遺物の検討からこの地震痕跡は安政南海地震（1854 年）に伴い形成された変形であると考えられる。また、安政南海地震とは年代が異なる可能性のある地震の変形構造も確認された。

花粉分析の結果、イネやナタネのほかにワタが栽培されていたことがわかった。古文書の調査によって判明していた錦栽培の実態を捉えた成果である。

#### 近代

1 区の南側において土坑群を検出した。当遺跡よりも南西に立地する長居東 2 丁目所在遺跡で検出された土坑と同様と考えられる。（財団法人大阪市文化財協会 2005）によれば、江戸時代末期から明治大初期にかけて「土探し」を生業とする人々がおり、昭和まで続いていたことが指摘されている。シルトを探掘している例が多いが、当遺跡においては基盤層の砂礫を採取していた。

今後に課題について述べておきたい。当遺跡については東に行くにしたがい高さを減じることから東側に多くの遺構が残されていた。当遺跡以東についても同様で遺跡の範囲はさらに東に広がる可能性が高く、引き続き埋蔵文化財の有無について調査を実施していく必要があろう。

### 第2節 耕地整理以前の土地区画

今回の調査では中世にはじまり近世まで踏襲された畦畔を検出できたのは大きな成果の一つである。以下では、畦畔及びそれに伴う耕作痕跡が北東に軸を持つ理由について少し検討を加えたい。

当遺跡周辺は耕地整理により大きく景観が変貌しており、現況からかつての地形を読み解くことが難しい。そこで、耕地整理以前の地形を復元することからはじめその様相を探りたい。

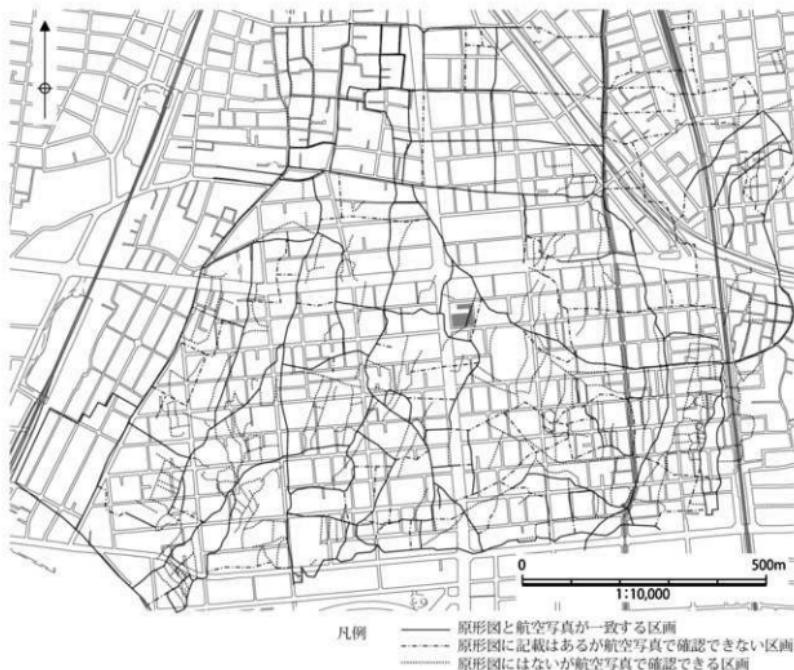


図 35 耕地整理以前の土地区画 大阪市の地形図に耕地整理以前の区画を追記して掲載

耕地整理以前の地形図は管見の限りにおいては（大阪市立田辺小学校創立 100 周年記念編集委員会 1973）に掲載がある「大阪市田辺耕地整理組合地区原形図」（以下、原形図と呼ぶ。）のみであった。また、昭和 3 年大阪市によって撮影された大阪市航空写真（以下、航空写真と呼ぶ。）には、一部ではあるが耕地整理以前の地形を確認することができる。そこでまず、原形図及び航空写真を GIS ソフト（QGIS 3.16）のジオリファレンスにより座標値を持つ画像へと変換した。次に航空写真的実体視により地形を判読した後、原形図との重なりを検討し現在の地形図上に耕地整理以前の区画<sup>1)</sup>を表現した（図 35）。ただし、調査地周辺は航空写真的重複がなく詳細な判読はできなかった。

図 5 に示しているように当遺跡は低位段丘面に立地しており、これより東側は沖積低地となる。低位段丘面の区画を見ると南西から北東に軸を持つ区画が多いのに対し、沖積低地部分では南から北に流れる駒川に沿った南北に軸を持つ区画が多く見られる。耕地整理以前には、基盤の地形に起因する区画が広がっていたと推測できる。今回の調査で検出した 116 畦群や耕作痕跡が北東に向く軸を持つ理由は、基盤である我孫子台地の地形に沿って開発された結果であると考えられる。さらに、調査成果から図 35 の区画は一部ではあるが中世にまで遡る可能性を示唆している。

航空写真を利用して復元した区画から土地利用の起因について考察した。今後とも近隣の発掘調査で検出される遺構を検討することにより上町台地の土地開発の歴史について検討を加えていきたい。

## 第5章 総括

### 註

- 1) 航空写真から水路・河川・池・道・畦畔などの微細な地形を読み取ることができなかつたため、ここでは地形の凹凸を区画と表現する。

### 引用・参考文献

- 市川一創・松田順一郎・小倉徹也・趙哲済・辻本裕也・平田洋司 2011「古環境と人間活動の関係把握に向けて一大阪市上町台地北部を題材として」『大阪文化財研究所研究紀要』第13号 財團法人大阪市文化財協会  
一般財團法人大阪市文化財協会 2019『大阪市文化財情報 荘火』195号  
今井美紀 1975「天明年間摂津縄作地帯の村況：現大阪市南部二三ヶ村の村明細帳をもとにして」『待兼山論叢』史学篇  
8 大阪大学  
大阪市立田辺小学校創立 100周年記念誌編集委員会 1973『田辺百年のあゆみ』大阪市立田辺小学校創立 100周年記念事業委員会  
大阪市市民局 1992『大阪の町名－その歴史－』下巻  
大阪市教育委員会・財團法人大阪市文化財協会 2010『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2008）』  
大阪市所有「大阪市所蔵航空写真（昭和3年）」は Web サイト大阪市マップナビおおさか、国土地理院電子国土基本図（地図情報）などで閲覧することができる。  
大阪府 1942『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12輯  
財團法人大阪市文化財協会 1998『桑津遺跡発掘調査報告』  
財團法人大阪市文化財協会 2005『大阪市住吉区長居東2丁目所在遺跡発掘調査報告書』  
財團法人大阪市文化財協会 2008『大阪遺跡－出土品・遺構は語るなにわ発掘物語』株式会社創元社  
新修大阪市史編纂委員会 1988『新修大阪市史』第1巻 大阪市  
田辺町誌編纂委員会 1925『田辺町誌』大阪府東成郡田辺町役場  
辻本裕也 2014「上町台地およびその周辺の植生史」『大阪上町台地の総合研究』公益財團法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所・大阪歴史博物館

## 遺物觀察表

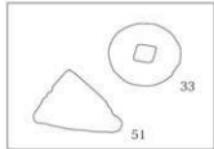
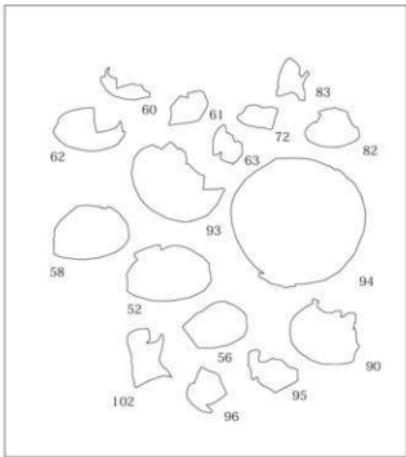
記載番号	地区	遺構・層位	種類	器種	口径	器高	底径・ 高臺径	法量 (cm / 指定内は復元値)	色調	胎土	焼成/ 備考
国18 1 1	第2層	土師器	碗	(4.0)	2.0	2.6	内:17.5YR7/6白 外:17.5YR7/6白 断:17.5YR7/6白	やや密 (2mm長石1ヶ、 雲母含む)	良 / 一部反転復元		
国18 2 1	第2層	土師器	始絡	一	残	5.3	内:17.5YR7/4に赤い相 断:17.5YR7/4に赤い相	やや粗 (2mm以下長石、 雲母含む)	良		
国18 3 1	第2層	陶器	すり鉢	(30.0)	2.6	—	内:110YR5/3に赤い黄褐 95.1N7/0灰白・10YR5/3に赤い黄褐 断:10YR5/3に赤い黄褐	やや密 (1mm以下灰・黒・ 褐色砂粒含む)	良 / 反転復元		
国18 4 1	第2層	白磁	碗	—	残	2.6	内:17.5YR8/4灰白 外:1N8/0灰白 断:1N8/0灰白	密	良 / 反転復元		
国18 5 1	第2層	束縛系 須恵器	すり鉢	—	残	3.3	内:1N9/0灰・N5/0灰 断:1N9/0灰	粗 (4mm長石2ヶ、2mm以 下黑色砂粒、長石含む)	良		
国18 6 1	第2層	須恵器	高杯	—	残	5.0	内:1N5/0灰 断:1N5/0灰	やや密 (1mm以下長石含 む)	良 / 一部反転復元		
国18 7 1	第2層	須恵器	高杯	—	残	2.9	内:1N6/0灰 断:1N6/0灰	やや粗 (2mm以下灰・黒・ 褐色砂粒含む)	良 / 反転復元		
国18 8 1	第3層	白磁	碗	(16.0)	1.7	—	内:12.5YR8/2灰白 外:12.5YR8/2灰白 断:12.5YR8/2灰白	密	良 / 反転復元		
国18 9 1	第3層	瓦器	碗	—	残	1.6	内:12.5YR6/4に赤い黄 外:15Y3/1アリーブ 断:11YR7/4に赤い黄褐	密	良 / 反転復元		
国18 10 1	第3層	瓦器	皿	(8.0)	1.0	—	内:1N8/0灰白 外:1N8/0灰白・N3/0暗灰 断:1N8/0灰白	やや密 (1mm以下長石、 灰色砂粒含む)	良 / 反転復元		
国18 11 1	第3層	土師器	皿	(8.0)	1.9	—	内:12.5YR6/2灰黄 9.12.5Y4/1黄灰 断:15YR6/6橙	やや密 (1mm以下灰色砂 粒含む)	良 / 反転復元		
国18 12 1	第3層	須恵器	有蓋高 つまみ 杯蓋	3.6	3.1	—	9.1N6/0灰・5Y4/2灰オーピ 断:1N6/0灰	やや粗 (1mm以下長石、 灰・褐色砂粒含む)	良 / 一部反転復元		
国18 13 1	第3層	須恵器	高杯	—	残	3.75	内:1N6/0灰 9.1N6/0灰 断:1N6/0灰	やや粗 (2mm以上灰・灰 色砂粒、長石含む)	良 / 反転復元		
国18 14 1	第3層	須恵器	高杯	—	残	2.4	内:1N7/0灰白 9.1N7/0灰白 断:1N7/0灰白	やや粗 (4mm灰色小石粒 1ヶ、1mm以下長石含む)	良 / 反転復元		
国18 15 1	第3層	須恵器	高杯	—	残	4.3	内:1N7/0灰 9.1N6/0灰 断:1N7/0灰	やや密 (1mm以下灰色砂 粒含む)	良 / 反転復元		
国18 16 1	第3層	須恵器	壺	—	残	3.7	内:1N6/0灰 9.1N6/0灰 断:17.5YR6/3に赤い褐色	やや粗 (3 ~ 5mm長石2 ヶ、2mm以下長石含む)	良 / 反転復元		
国18 17 1	第3層	陶質土器	壺	(16.0)	3.5	—	内:1N4/0灰 9.1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	密 (1mm以下長石含む)	良 / 反転復元		
国18 18 1	108	陶質土器	壺	—	残	5.3	内:1N4/0灰 9.1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	やや密 (2mm以下長石含 む)	良 / 反転復元		
19 1	第3層	陶質土器	—	最大長 最大幅	6.2	6.3	内:1N4/0灰 外:1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	やや密 (2mm以下長石含 む)	良 / 国版13のみ		
20 1	第3層	陶質土器	—	最大長 最大幅	6.4	4.6	内:1N4/0灰 外:1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	やや密 (2mm以下長石含 む)	良 / 国版13のみ		
21 1	第3層	陶質土器	—	最大長 最大幅	4.3	2.8	内:1N4/0灰 外:1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	やや密 (2mm以下長石含 む)	良 / 国版13のみ		
22 1	第3層	陶質土器	—	最大長 最大幅	3.3	4.0	内:1N4/0灰 9.1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	やや密 (2mm以下長石含 む)	良 / 国版13のみ		
23 1	第3層	陶質土器	—	最大長 最大幅	4.1	3.7	内:1N4/0灰 9.1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	やや密 (2mm以下長石含 む)	良 / 国版13のみ		
24 1	第3層	陶質土器	—	最大長 最大幅	4.5	2.4	内:1N4/0灰 9.1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	やや密 (2mm以下長石含 む)	良 / 国版13のみ		
25 1	第3層	陶質土器	—	最大長 最大幅	6.2	2.8	内:1N4/0灰 9.1N4/0灰 断:17.5YR5/1灰灰	やや密 (2mm以下長石含 む)	良 / 国版13のみ		

掲載番号	地区	造構・層位	種類	器種	法量(cm/括弧内は厘米単位)			色調	胎土	焼成/備考
					口径	器高	底径・ 高台径			
国18 26 1 047			須恵器	杯蓋	(12.0)	残 3.1	—	内)N5/0灰 外)N7/0灰白 断)N6/0灰	やや粗(3mm長石1ヶ、2mm以下灰色砂粒含む)	良/ 反転復元
国18 27 1 047			須恵器	杯身	(10.0)	残 3.9	—	外)N7/0灰白 内)N5/0灰・5W2/1明闇灰 断)N7/0灰白	やや密(1mm以下長石、灰・黑色砂粒含む)	良/ 反転復元
国18 28 1 048			須恵器	甕	(15.0)	残 4.2	—	外)N4/0灰・7.5Y5/2灰オーリー 内)N5/0灰・5W2/1明闇灰 断)N7/0灰白	やや粗(4mm長石2ヶ、2mm以下長石、灰・黑色砂粒含む)	良/ 反転復元
国18 29 1 093			須恵器	甕	(18.7)	残 5.5	—	外)N7/0灰白・7.5Y5/3灰オーリー 内)N5/0灰白 断)N7/0灰白	粗(3mm長石1ヶ、2mm以下長石、黒・灰色砂粒含む)	良/ 反転復元
国18 30 1 093			須恵器	高杯	—	残 5.5	—	外)N7/0灰白 内)N5/0灰 断)N5P5/1黒灰	やや密(1mm以下長石含む)	良/ 一部反転復元
国18 31 1 093	土師質 土器	カマド 底	最大長 10.9	最大幅 7.1	—	—	内)5Y6/6灰 外)5Y6/6灰 断)2.5Y5/2灰白	やや粗(2mm以下灰・褐色砂粒) 粗(4mm長石1ヶ、2mm以下長石、灰色砂粒含む)	良	
国18 32 1 土坑群	須恵器	高杯	—	—	残 4.2	(9.0)	内)N5/0灰 外)N5/0灰 断)2.5Y5/1黒灰	粗(4mm長石1ヶ、2mm以下長石、灰色砂粒含む)	良/ 反転復元	
国19 33 1 挿乱	鉢	残片	—	—	径 2.5	—	—	—	—	初期、 原色回版
国20 34 2 第2層	瓦器	皿	(14.0)	—	残 1.95	—	内)2.5Y7/1灰白・5Y5/1灰 外)2.5Y7/1灰白・5Y5/1灰 断)2.5Y7/1灰白	密(2mm以下の白・暗灰・ 色砂粒含む)	良/ 反転復元	
国20 35 2 第2層	土師器	皿	(13.0)	—	残 1.6	—	外)10Y7/2/4に5・黄褐 内)10Y7/2/4に5・黄褐 断)10Y7/2/4に5・黄褐 (10Y4/1題記)	密(2mm以下の淡茶砂粒 少し含む)	良/ 反転復元	
国20 36 2 第3層	須恵器	すり跡	—	—	残 3.4	(8.5)	内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)N6/0灰	やや密(3mm以下の白・ 灰色砂粒やや多く含む)	良/ 反転復元	
国20 37 2 第3層	瓦質土器	羽釜	(18.2)	—	残 3.4	—	外)2.5Y7/1灰白 内)2.5Y7/1灰白 断)2.5Y7/1灰白	密(2mm以下の白・暗灰・ 淡茶色砂粒含む)	良/ 反転復元	
国20 38 2 第3層	瓦器	椀	(14.0)	—	残 3.1	—	内)N5/0灰 外)N5/0灰 断)N8/0灰白	やや密(1mm以下灰色砂 粒含む)	良/ 反転復元	
国20 39 2 第3層	瓦器	椀	(14.0)	—	残 2.0	(4.0)	内)N5/0灰・5Y8/1灰白 外)N4/0灰・5Y8/1灰白 断)5Y8/1灰白	密(2mm以下の白・ 灰色砂粒含む)	良/ 反転復元	
国20 40 2 第3層	瓦器	椀	—	—	残 1.4	(4.8)	内)2.5Y6/1灰 外)2.5Y8/1灰白 断)2.5Y8/1灰白	密(1mm以下灰色砂粒含 む)	不良/ 反転復元	
国20 41 2 第3層	瓦器	椀	—	—	残 1.4	(5.2)	内)N8/0灰 外)N8/0灰白・N4/0灰 断)10YR6/4に5・黄褐	密	良/ 反転復元	
国20 42 2 第3層	瓦器	椀	—	—	残 1.2	(6.0)	内)N4/0灰・N7/0灰白 外)N8/0灰白	密	良/ 反転復元	
国20 43 2 第3層	瓦器	皿	(9.6)	—	残 1.7	—	内)N3/0灰・5Y8/1灰白 外)N3/0灰・5Y8/1灰白 断)5Y8/1灰白	密(2mm以下灰色砂粒、 長石含む)	良/ 反転復元	
国20 44 2 第3層	青磁	椀	—	—	残 3.0	(6.2)	施釉2.5G6Y1オーリー灰 内)2.5Y7/1灰白 断)10YR6/2灰黄褐	密	良	
国20 45 2 第3層	瓦質土器	すり跡	(29.0)	—	残 3.9	—	内)N3/0灰 外)N3/0灰 断)2.5Y7/1灰白	粗(2mm以下灰色砂粒、 石英、雲母含む)	良/ 反転復元	
国20 46 2 第3層	須恵器	すり跡	(27.0)	—	残 3.1	—	内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)N6/0灰	粗(3mm長石1ヶ、2mm以 下長石含む)	良/ 断面図のみ	
国20 47 2 第3層	須恵器	すり跡	—	—	残 4.1	—	内)N7/0灰白 外)N7/0灰白・N4/0灰 断)N7/0灰白	やや粗(2mm以下長石、 灰・黑色砂粒含む)	良/ 断面図のみ	
国20 48 2 第3層	須恵器	すり跡	—	—	残 3.4	—	内)2.5Y6/1灰 外)2.5Y5/1灰 断)2.5Y5/1灰	粗(3mm長石2ヶ、2mm以 下長石含む)	良	
国20 49 2 第3層	土師質 土器	カマド	最大長 8.5	最大幅 4.8	—	内)5W7/3に5・黄 外)5YR7/4に5・相 断)2.5Y8/1灰白・2.5Y5/1黄灰	やや密(2mm以下長石含 む)	やや不良		
国20 50 2 第3層	土師器	把手	最大長 4.9	最大幅 3.8	—	内)2.5Y5/6明褐 外)2.5Y5/6明褐 断)2.5Y5/6明褐	やや密(2mm褐・褐色砂 粒含む)	良		
51 2 第3層	綠釉陶器	杯	最大長 2.0	最大幅 2.9	—	釉装1.5GY8/1明緑灰 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	密	原色回版のみ		
国21 52 2 第3層	須恵器	杯蓋	(12.5)	—	残 4.4	—	内)N7/0灰白 外)N7/0灰白・N4/0灰 断)N7/0灰白	粗(3~4mm長石、2mm以 下長石、灰・黑色砂 粒含む)	良/ 一部反転復元	

開闢番号	地区	遺構・層位	種類	器種	口径 器高	法量(cm <sup>3</sup> /底面内4箇元測) 底径・ 高台径	色調	胎土		焼成 備考
								内	外	
国21 53 2	第3層	須恵器	杯蓋	(12.0)	3.7	—	内 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや粗(2mm以下長石、 灰・黒色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 54 2	第3層	須恵器	杯蓋	(12.0)	3.3	—	内 IN5/B5/1青灰 斯 IN5/B5/1青灰	やや密(1mm以下長石含 む)	良 / 反転復元	
国21 55 2	第3層	須恵器	杯蓋	(12.0)	4.8	—	内 IN5/0灰 斯 IN5/0灰	粗(4mm長石2ヶ、2mm以 下長石、灰・黒色砂粒 含む)	良 / 反転復元	
国21 56 2	第3層	須恵器	杯蓋	(11.3)	4.2	—	内 IN5/0灰 斯 IN5/0灰	やや粗(2mm以下長石、 灰・黒色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 57 2	第3層	須恵器	杯蓋	(11.4)	2.7	—	内 IN5/0灰 斯 IN5/0灰	やや粗(2.5mm以下長 石含む)	良 / 反転復元	
国21 58 2	第3層	須恵器	杯蓋	(12.8)	5.2	—	内 IN7/0灰 斯 IN7/0灰	やや粗(4mm長石2ヶ、2 mm以下長石含む)	良 / 反転復元	
国21 59 2	第3層	須恵器	杯蓋	—	4.4	—	内 ISY7/1灰白 斯 ISY7/1灰白	粗(3~5mm長石、2mm 以下長石、灰・黒色砂 粒含む)	やや良 / 一部反転復元	
国21 60 2	第3層	須恵器	杯身	(11.4)	5.0	—	外 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや密(4mm以下長石、 2mm以下長石、灰色砂粒 含む)	良 / 反転復元	
国21 61 2	第3層	須恵器	杯身	(11.0)	4.9	—	内 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや密(2mm以下長石、 灰色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 62 2	第3層	須恵器	杯身	(10.0)	4.8	—	内 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや密(1mm以下長石、 灰色砂粒含む)	良 / 一部反転復元	
国21 63 2	第3層	須恵器	杯身	(10.6)	4.8	—	外 IN7/0灰白 斯 IN7/0灰白	やや密(2mm以下長石、 灰・黒色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 64 2	第3層	須恵器	杯身	(9.2)	3.4	—	外 IN7/0灰白 斯 IN7/0灰白	やや密(1mm以下長石、 灰・黒色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 65 2	第3層	須恵器	杯身	(9.2)	3.7	—	内 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	粗(5mm長石1ヶ、2mm以 下長石含む)	良 / 反転復元	
国21 66 2	第3層	須恵器	杯身	(9.6)	3.5	—	外 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや粗(2mm以下長石含 む)	良 / 反転復元	
国21 67 2	第3層	須恵器	杯身	(10.0)	3.6	—	外 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや密(2mm以下灰・黒 色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 68 2	第3層	須恵器	杯身	9.6	3.8	—	内 ISPB6/1青灰 斯 ISPB6/1青灰	やや密(2mm以下長石含 む)	良 / 反転復元	
国21 69 2	第3層	須恵器	杯身	(9.6)	3.1	—	外 IN8/0灰白 斯 IN8/0灰白	やや密(1mm以下灰・黒 色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 70 2	第3層	須恵器	杯身	(9.6)	3.3	—	内 IN5/0灰 斯 IN5/0灰	やや密(2mm以下長石、 灰色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 71 2	第3層	須恵器	杯身	(10.4)	3.6	—	内 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや粗(3mm長石、2mm 以下灰・黒色の砂粒含 む)	良 / 反転復元	
国21 72 2	第3層	須恵器	杯身	(10.6)	4.0	—	外 IN7/0灰白 斯 IN7/0灰白	粗(4mm長石、2mm以下 長石含む)	良 / 反転復元	
国21 73 2	第3層	須恵器	杯身	(11.2)	2.5	—	内 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや密(2mm以下長石、 黒色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 74 2	第3層	須恵器	杯身	—	3.4	—	内 IN7/0灰白 斯 IN7/0灰白	やや粗(3mm長石1ヶ、1 mm以下長石、灰色砂粒 含む)	良 / 反転復元	
国21 75 2	第3層	須恵器	杯身	—	3.8	—	内 ISPB7/1青灰 斯 IN8/0灰	やや密(2.5mm以下長石、 灰色砂粒含む)	良 / 反転復元	
国21 76 2	第3層	須恵器	杯身	(12.0)	3.8	—	外 IN7/0灰白 斯 IN7/0灰白	粗(4mm長石、2mm以下 長石、灰・黒色砂粒含 む)	良 / 反転復元	
国21 77 2	第3層	須恵器	有高つまみ 杯蓋	3.3	1.8	—	外 IN6/0灰 斯 IN6/0灰	やや密(2mm以下灰色砂 粒、長石含む)	良 / 一部反転復元	
国21 78 2	第3層	須恵器	高杯	—	3.15	—	内 12.5Y7/1灰白 外 11.0Y86/1烟灰 斯 12.5Y7/1灰白	密(4mm以下の白砂粒少 しあり)	良 / 反転復元	
国21 79 2	第3層	須恵器	高杯	—	5.1	—	内 IN7/0灰白 斯 IN7/0灰白	密(2.5mm以下の暗灰色 砂粒含む)	良 / 反転復元	

掲載番号	地区	造機・層位	種類	器種	法量(km <sup>3</sup> /畠(約600m <sup>2</sup> ))		底鋸 高台鋸	色調	胎土	焼成 備考
					口径	器高				
岡21 80 2	第3層	須恵器	高杯	一	残 2.8	内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)SYR6/1銀灰	内)N5/0灰 内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)N6/0灰	密(3mm以下の白砂粒少 し含む)	良/ 一部反転	
岡21 81 2	第3層	須恵器	高杯	一	残 4.3	(10.0) 内)N5/0灰 内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)N6/0灰	密(2mm以下の白砂粒少 し含む)	良/ 反転復元		
岡21 82 2	第3層	須恵器	高杯	一	残 6.0	(8.8) 内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)N6/0灰	密(3mm以下の白砂粒含 む)	良/ 一部反転		
岡21 83 2	第3層	須恵器	高杯	一	残 5.8	(10.3) 内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)N7/0灰白	密(1mm以下の白・暗灰 砂粒含む)	良/ 反転復元		
岡21 84 2	第3層	須恵器	高杯	一	残 3.0	(10.0) 外)N7/0灰白 断)N7/0灰白	密(1mm以下の灰褐色砂 粒含む)	良/ 反転復元		
岡21 85 2	第3層	須恵器	高杯	一	残 265	(10.0) 外)N6/0灰 断)N6/0灰	密(1mm以下の白・暗灰 砂粒含む)	良/ 反転復元		
岡21 86 2	第3層	須恵器	高杯	一	残 3.3	(10.6) 外)N6/0灰 断)N5/0灰	密(1mm以下の白砂粒少 し含む)	良/ 反転復元		
岡22 87 2	第3層	須恵器	齒か 貝	(16.0) 3.6	外)N5/0灰 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	内)N2/5Y5/1黄褐 外)N5/0灰 内)N7/0灰白	やや密(1mm以下長石含 む)	良/ 反転復元		
岡22 88 2	第3層	須恵器	齒か 貝	(13.0) 3.5	外)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	外)N7/0灰白+N4/0灰 内)N6/0灰 断)N8/0灰白	やや粗(3~4mm長石2 ヶ、2mm以下長石含む)	良/ 反転復元		
岡22 89 2	第3層	須恵器	齒か 貝	(12.0) 3.7	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N10/6/2灰赤	外)N6/0灰 内)N8/0灰白 断)N10/6/2灰赤	やや粗(3mm長石1ヶ、1 mm以下長石含む)	良/ 反転復元		
岡22 90 2	第3層	須恵器	齒	一	残 6.3	外)N5/0灰 内)N5/0灰 断)N5/0灰	平や粗(3mm長石、2mm 以下灰・黑色砂粒、長 石含む)	良/ 反転復元		
岡22 91 2	第3層	須恵器	齒	一	残 6.2	外)N7/0灰白 内)N4/0灰 断)N5/0灰	粗(3mm長石1ヶ、2mm 以下長石含む)	良/ 反転復元		
岡22 92 2	第3層	須恵器	齒	一	残 5.9	外)N4/0灰+5Y5/2灰オリーブ 内)N7/0灰白 断)N2/5Y5/1黄	やや粗(2mm以下長石含 む)	良/ 反転復元		
岡22 93 2	第3層	須恵器	齒	一	残 12.6	外)N7/0灰白+N4/0灰 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	やや粗(3mm長石1ヶ、2 mm以下灰・黑色砂粒、 長石含む)	良/ 反転復元		
岡22 94 2	第3層	須恵器	齒	一	残 17.0	内)N2/5Y5/1黄褐 断)N2/5Y5/1黄褐	密(2mm以下の白砂粒少 し含む)	良/ 一部反転		
岡22 95 2	第3層	須恵器	蟲	(11.0) 3.4	内)N7/0灰白+N7.5Y6/1灰 外)N3/0灰白 断)N6/0灰	内)N7/0灰白 外)N3/0灰白 断)N6/0灰	やや密(2mm以下灰褐色 砂粒、長石含む)	良/ 反転復元		
岡22 96 2	第3層	須恵器	齒か 直口蟲	一	残 6.2	外)N6/0灰+N4/0灰 内)N6/0灰	やや密(1mm以下長石含 む)	良/ 反転復元		
岡22 97 2	第3層	須恵器	蟲	一	残 5.3	外)N5/0灰 内)N7/0灰白 断)N5/0灰+5RP5/1集灰	やや粗(3mm長石2ヶ、1 mm以下長石含む)	良/ 断面図のみ		
岡22 98 2	第3層	須恵器	蟲	(25.0) 5.6	外)N7/0灰白 内)N6/0灰 断)N8/0灰白	外)N7/0灰白 内)N6/0灰 断)N8/0灰白	やや粗(3mm色小石粒 1ヶ、2mm以下灰・黑色 砂粒、長石含む)	良/ 反転復元		
岡22 99 2	第3層	須恵器	蟲	(21.0) 5.0	外)N5/0灰 内)N6/0灰 断)N5/0灰+N8/0灰白	内)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N5/0灰+N8/0灰白	やや粗(3mm長石1ヶ、1 mm以下長石含む)	良/ 反転復元		
岡22 100 2	第3層	須恵器	蟲	(18.0) 4.5	内)N7/0灰白 内)N6/0灰 断)N7/0灰白	内)N7/0灰白 内)N6/0灰 断)N7/0灰白	やや粗(1mm以下灰色砂 粒、長石含む)	良/ 反転復元		
岡22 101 2	第3層	須恵器	器台	一	残 7.3	外)N6/0灰 内)N6/0灰 断)N6/0灰	やや密(2mm以下長石含 む)	良/ 反転復元		
岡22 102 2	第3層	須恵器	捷瓶	4.4	残 6.0	内)N7/0灰白+N8/0灰白 外)N5/0灰 内)N8/0灰白 断)N8/0灰白	やや密(1mm以下長石、 灰・黑色砂粒含む)	良/ 反転復元		
岡23 103 2	149	須恵器	杯蓋	(12.0) 2.5	内)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	内)N7/0灰白 内)N7/0灰白 断)N7/0灰白	密(3mm以下小石粒1ヶ、 0.5mm以下灰砂粒含む)	良/ 反転復元		
岡23 104 2	149	土製品	有孔 土器	最大長 3.6	外)17.5YR7/4に灰 土壁 1.2	外)17.5YR7/4に灰 土壁 1.2	密(2mm以下の白・灰色 砂粒含む)	良		
岡23 105 2	134	須恵器	蟲	(17.0) 5.2	内)110Y5/1灰 内)110Y5/1灰 断)N4/0灰+N7/0灰白	内)110Y5/1灰 内)110Y5/1灰 断)N4/0灰+N7/0灰白	やや粗(3mm色小石粒 1ヶ、2mm以下灰褐色 砂粒含む)	良/ 反転復元		
岡23 106 2	第3層	石器	石鑼	最大長 5.6	最大幅 1.8	内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)N6/0灰	—	—	—	
岡23 107 2	第3層	石器	スク レー	最大長 4.4	最大幅 3.0	内)N6/0灰 外)N6/0灰 断)N6/0灰	—	—	—	

# 図 版





2区第3層出土須恵器



1区出土銭貨・2区出土綠釉陶器

図版  
一区  
全景



a. 1区東半  
第5層上面  
北から



b. 1区東半  
第5層上面  
北西から



c. 1区東半  
第5層上面  
北から

図版  
1区・2区  
全景



a. 1区西半  
第5層上面  
北から



b. 2区  
第5層上面  
西から



c. 2区  
第5層上面  
南西から

図版  
1区・2区  
壁面



a. 1区東半  
北壁  
南から



b. 1区東半  
西壁  
南東から



c. 2区  
東壁  
西から

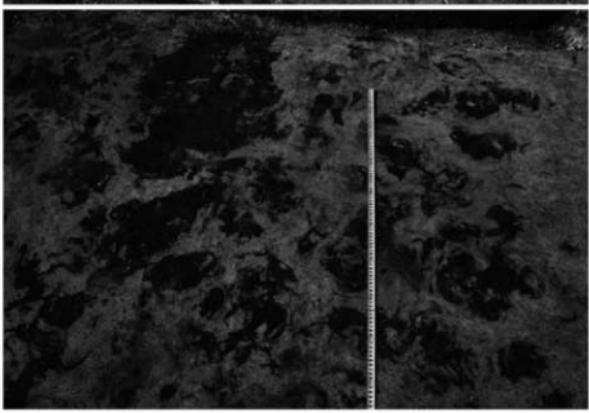
a. 2区  
116 畦畔  
北から



b. 1区  
007 土坑  
南から



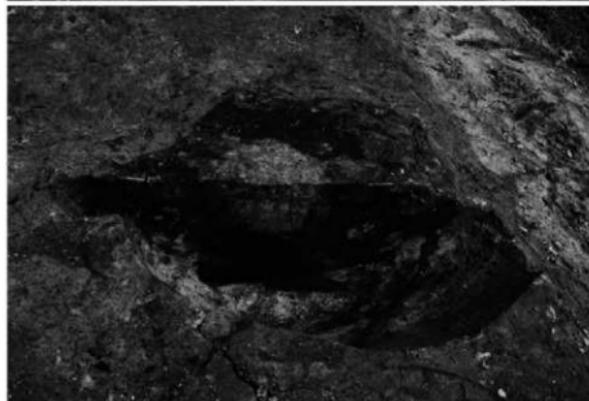
c. 2区  
荷重痕  
上が西



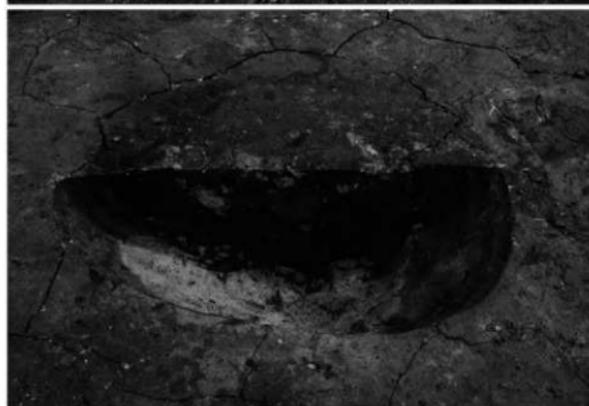
図版五  
1区  
遺構(一)



a. 1区  
掘立柱建物 1  
北西から



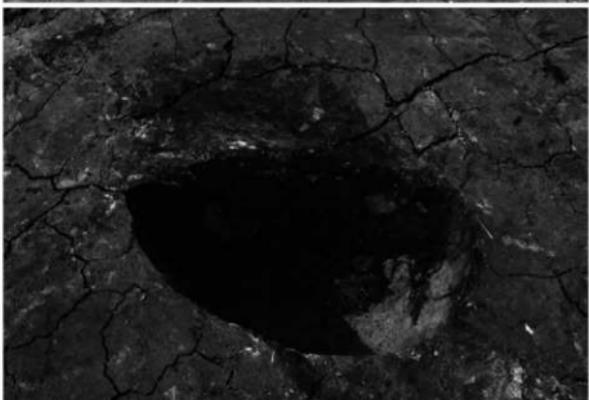
b. 1区  
021柱穴  
南から



c. 1区  
024柱穴  
南から



a. 1区  
026 柱穴  
南から



b. 1区  
030 柱穴  
南から



c. 1区  
002 井戸上部  
西から

図版七  
1区・2区  
遺構(1)



a. 1区  
002 井戸下部  
西から



b. 1区  
012 落ち込み  
東から



c. 2区  
183 柱穴  
西から

図版八 1区 遺構(二)





a. 1区  
082土坑  
南から



b. 1区  
091土坑  
南西から



c. 2区  
131溝  
南から



a. 1区  
029 溝  
東から



b. 1区  
049 溝  
西から



c. 1区  
050 溝  
西から

図版一 区 遺構(五)



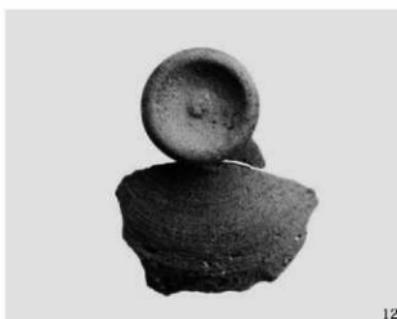
a. 1区  
040溝  
南から



b. 1区  
067溝  
南から



c. 1区  
083溝  
南東から



a. 須恵器 有蓋高杯蓋

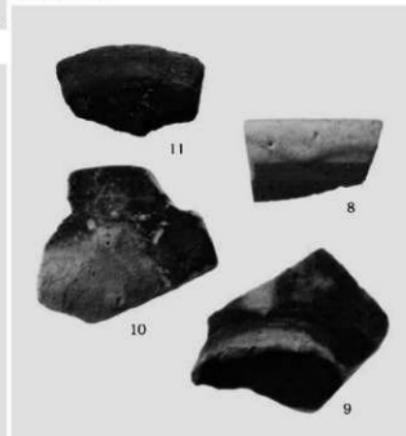


b. 須恵器 壺

12



c. 須恵器 高杯

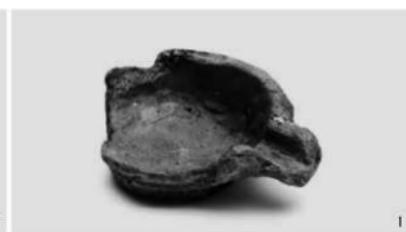


d. 瓦器 檀・皿・土師器 皿・白磁 檀

16



e. 東播系須恵器 すり鉢



f. 土師器 檀

1



g. 陶器 すり鉢



h. 白磁 檀

4

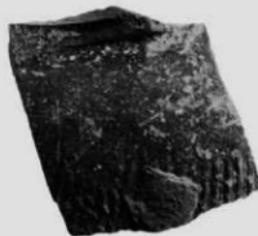
図版 III-1区 出土遺物 (1)



17



a. 陶質土器 帯口縁部



18

b. 陶質土器 両体部片



19



21



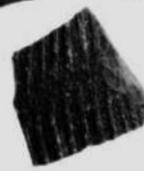
24



20



22



23



25

c. 陶質土器 体部片



31

d. 遺構 93 出土 土師器 カマド



2

e. 土師器 燃焼



26



27



30



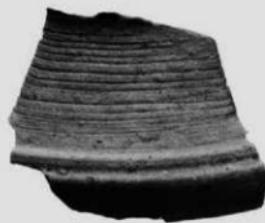
7

a. 遺構 47 出土 須惠器 杯蓋・杯身

b. 遺構 93 他出土 須惠器 高杯



28



32

c. 遺構 48 出土 須惠器 瓢

d. 上坑群出土 須惠器 高杯



29

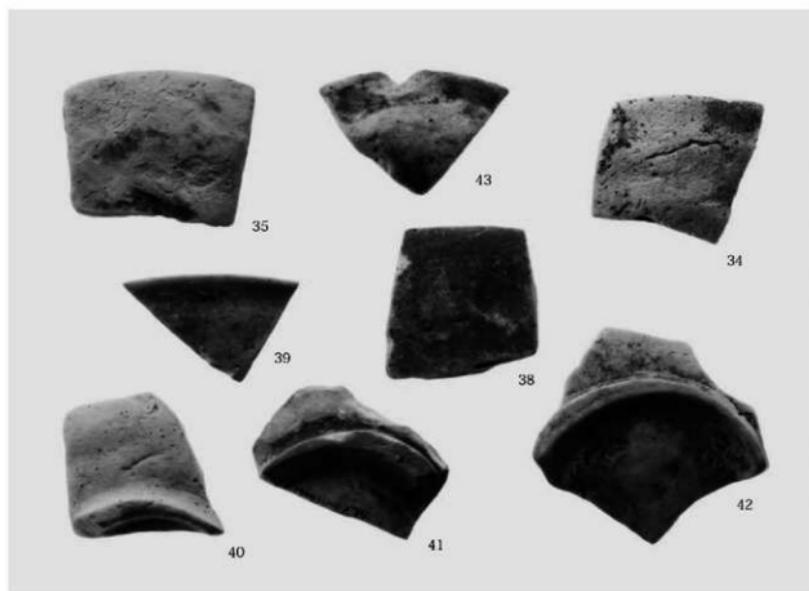
e. 遺構 93 出土 須惠器 瓢



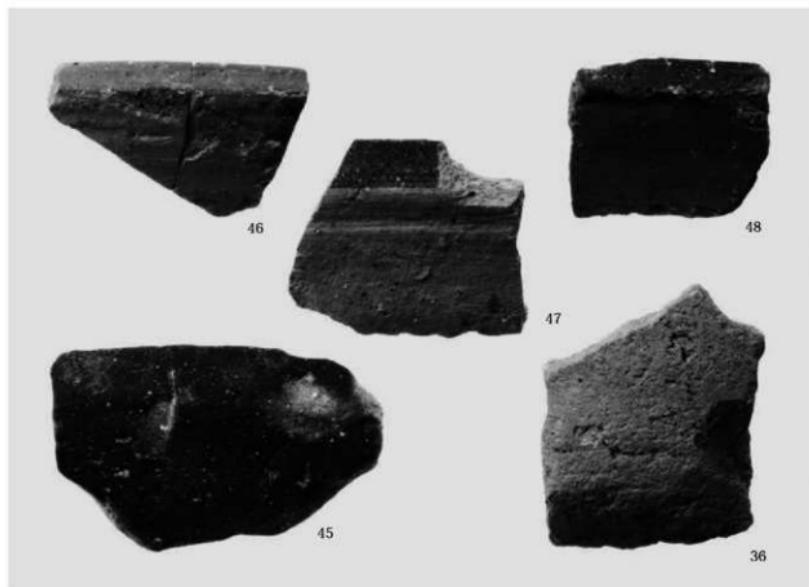
6

f. 須惠器 高杯

図版一五 2区 出土遺物(一)



a. 第2・3層出土 土師器 皿・瓦器 梱・皿



b. 第2・3層出土 瓦質土器・須恵器 すり鉢



58



52



56



59



62



60



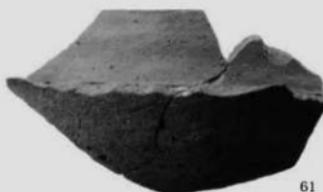
64



65



72



61



63

圖版一七二區 出土須惠器(一)



83



82



79



86



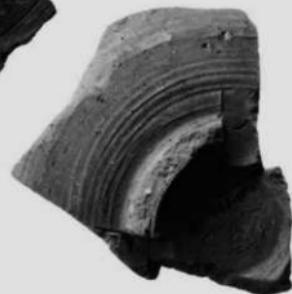
85



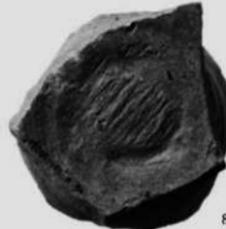
84



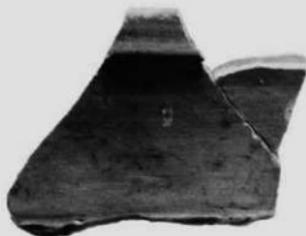
77



78



80



99



97



100



98



94

圖版一九二區 出土須惠器（四）



96



88



101



87



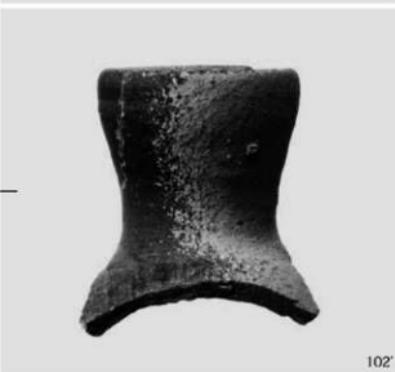
89



93



—



図版二  
2区  
出土遺物

(1)



105

a. 遺構 134 出土 須恵器 裸



103



104

b. 遺構 149 出土 須恵器 杯身・有孔土縫



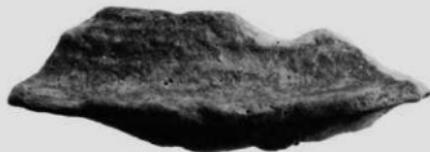
44

c. 青磁 梱



50

d. 上師器 把手



37

e. 瓦質土器 羽釜



49

f. 土師質土器 カマド



106



106'

g. 石器 石鏃



107

h. 石器 スクレーパー

## 報告書抄録

大阪府埋蔵文化財調査報告2020-2

## 東田辺遺跡

—大阪府東住吉警察署改築工事に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目  
TEL 06-6941-0351(代表)

発行日 令和3年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所  
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号